

ヒマラヤ

No. 116

● 特集 インド・ヒマラヤ1979年の記録



1981 JUL

日本ヒマラヤ協会



THE HIMALAYAN ASSOCIATION OF JAPAN — HAJ

1982年ヒマラヤ登山学校隊員募集

クン (7,077 m)

1980年登山学校は、20名中19名がケダルナート・ドーム(6,831m)に登頂するという成果をあげて帰国しました(本誌109号既報)。隊員の中にはすでにヒヤラヤ、アンデス、アラスカ等における高所登山経験者から、国内の冬山すら未経験という人にいたるまで幅広い層が参加していました。H A Jでは経験豊富なインストラクターのもとに、正しいセオリーにのっとり安全確実な高所登山を指導しております。隊員はすべて、装備・食糧・梱包・輸送・渉外等の具体的な準備実務にも参画していただき、また国内での強化合宿も行なうなど、ヒマラヤ遠征全般について体得することができます。次回には自ら遠征を行なえる人材を養成することが、この登山学校の主眼となっております。実際に、卒業生の中には自ら隊長となって隊を組織し、成功をおさめて帰ってくる意欲的な人もでてきております。

1982年度はカシミール・ヒマラヤの秀峰クン(7,077m)にて実施する予定でおります。ふるって御参加下さい。

実施要項

- 目的 ①クン(7,077m)登頂
②高所登山の基礎修得
- 時期 1982年7月末～8月末
- 負担金 69万円(航空運賃の変動等により変わることもあります)
- 定員 20名(申込順)
インストラクター4名(医師含む)
- 申込み 1981年11月末までに下記宛に申込みこと(資料を送ります)
- 〒160 東京都新宿区高田馬場3-23-1
淀橋食糧ビル506 日本ヒマラヤ協会

この登山隊の旅行手続は、(株)西遊旅行が担当します。旅行業代理店業1976号

表紙写真

ネパール西北部クワリ・コーラの奥にあるサイバル東壁である。頂上のように見えるのが6,922mピークで、サイバル本峰の頂上は、雪煙がかすかに上っているところである。Neta村のポーターは、サイバルをサイバルス、この氷河のある谷をラマンと呼んでいた。

写真：細貝 栄

ヒマラヤ No. 116

1. **特集** インド・ヒマラヤ1979年の記録2
6. ヒマラヤニュース<トピックス・インフォメーション・新刊>
9. カンチ通信No.4 カンチ学術隊便り
12. 56年度日本ヒマラヤ協会通常総会報告
21. 81年H A J登山学校計画書
26. **連載** ヒマラヤ閑話④1 水野 勉
28. ヒマラヤの図書紹介④
29. 事務局日誌・寸感

※都合によりヒマラヤ放談・トレッキング許可で登れる山は休載させていただきます。

インド・ヒマラヤ1979年の記録—2

稲田 定重

第114号につづいて1979年の記録(インド隊、外国隊の記録)を紹介する。なお、日本隊の記録は他の山岳誌にまとめられているので除くことにした。

1980年の記録については、IMFに登録された登山隊が、インド隊61、外国隊62と過去の最高にのぼった。一度にのせきれないので折りをみて特集したいと思う。

資料: Indian Mountaineer (IMF) = IM
Himavanta (Culcutta) = Hv.
American Alpine Journal (AAC) = AAJ
Alpine Journal (AC) = AJ
Himalayan Journal (HC) = HJ

なお、記録不詳のものが幾つかあるがあえて掲載してある。

シッキム・ヒマラヤ

1. Guicha (6,279m)、Pandim (6,691m)

① Diganta (Culcutta) ② Samarendra Nath Dhar 10名 ③ トランスポートのトラブルから両ピークとも断念した。BC (4,261m, Onglakthang GL)、C1 (4,591m)、C2 (4,947m, Guicha Laの下) と進め東稜をとったが5,486mで断念し、Pandimに転進した。

C2を5,181mの北稜上に設けたがひじょうな悪天におそわれ断念した。

Pandimは、北々西稜から可能と言っている。また、Guichaは東稜からルートがとれるようである。④ IM-Na 5

2. Siniolchu (6,887m)

① Sonam Gyatso Mountaineering Institute (Gangtok) ② Sonam Wangyal 42名 ③ BCをZemu G1の4,818m地点に設置(5月7日)、C1を5,049m(Siniolchu G1 5月10日)、雪原の右の5,290mに5月12日、C3をコルの下の

記載順序

- ① 国名・隊名(インド隊は国名省略)
- ② 隊長名と隊員数(隊長を含めて)
- ③ 記事
- ④ 引用資料名

5,884m(5月14日)、C4を5月17日に6,286mに設けてアタックした。

5月18日にG.Thinleyら6名、5月20日にPhurbu Tsering(副隊長)ら6名、5月21日にG.Sherpaら3名、5月23日、G.Thinleyら6名の計21名が大量登頂した。

5月24日に雪崩事故があったが死亡者を出すにいたらなかった。

Siniolchuはその美しさで世界的に知られているが、登攀は、氷とナイフリッジの困難なものであった。この登山は近年のインド登山界にあって出色のものであり、登山技術のレベルアップを実証している。

この登山学校の初代校長のSanam Gyatsoは、エベレストの一人で、1968年に亡くなっている。

④ I.M-Na 5

3. Simvu (6,811m)

① NCC ② Maj. Pushkar Chand (Parachute regiment) 13名 ③ ガンтокからラチェンまで車で入る。30人のポーターとヤクで2隊2ルートに分かれキャラバン、BCをGreen Lake (4,876m)に設けた。ABC(Zemu GL 5,181m)、C1 (5,486m)、C2 (6,217m)、C3 (6,583m)

5月27日に Chering Nurbu をリーダーとして、S.C.Pathak、N.K.Sub、Hav.K.S.Raṇa が午前10時30分登頂に成功した。(東南稜) Simvu は頂上部分が幾つにも分れているが今回登ったのは最高点である。④ I M-Na 5

カシミール・ヒマラヤ

4. Kun (7,087m)

①西ドイツ ②Franz Bayerschmidt ③8月12日、15日に2パーティに分れて登頂した。

④ I M-Na 5、A A J-1980

5. Kun (7,087m)

①オーストリア(オーストリア山岳会Graz支部) ②Gerwalt Pichler 13名(5名の女性を含む) ③Shaft 氷河の4,395mに6月13日にBC設置。C1(5,000m)、C2(6,000m)、C1とC2の間に200mをフィックス。6月20日、B.Erichら3名が登頂、6月23日にPichlerら女性1名を含む5名が登頂した。④ I M-Na 5

6. Barnaj-II (6,290m)

①英国 ②Jim Curran 5名 ③8月29日、Barnaj Nallaの4,114mにBC設置。Barnaj-II南峰の南稜から2回のビバークでアルパインスタイルによって登頂を試みたが悪天候に阻まれ南峰に達しただけで終わった。④ A A J 1980

7. Brammah-II (6,485m)

①英国 ②Mo Anthoine, Bill Barker, Joe Brown, Pete Minks ③5,486mの南西のコルにキャンプをのびしたが悪天候と新雪に阻まれ断念した。④ A A J 1980

8. Brammah's Wife (5,405m)

①Poland ②Ryszard Urbanek 3名 ③9月15日に第2登成功 ④ A A J 1980

9. Brammah's Wife (5,405m)

①英国 ②Anthony Wheaton 6名 ③WifeとEiger(5,513m)両峰のアルパインスタイル登攀をめざした。ブランマー氷河の3,657mにBCを設けたが悪天候に会い第1次アタック失敗、第2次のWheatonとR.Hesterがビバークのあと9月17日に登頂した。(第3登である)

④ A A J-1980

10. Kun (7,135m)

①オーストリア ②2名 ③IMFの許可をとらずに試登した。④ A A J-1980

11. P.6013(6,013m)

①ポーランド ②Marusz Koras 5名 ③アイガーの東の無名峰、初登頂(9月) ④ A A J-1980

12. Nun (7,135m)

①イタリー ②Alberto Re 10名 ③女性3名を含む。9月26日BC設置。スキーを使用し、東稜から6,000mに達したがルートが困難なため転進。White Needle(6,700m)に10月6日、Re A.Boscolo, Gigi Borsaniの3名が登頂した。

13. Nun (7,135m)

①スペイン ②ホセ・ロドリゲス 15名 ③北稜にC4まで設けたが6,600mで断念した。④岩と雪第81号

14. Gulap Kangri (5,900m)

①西ドイツ ②不明 ③登頂(8月) ④ I M-Na 6

15. Parcha Kangri (6,030m)

①西ドイツ ②不明 ③登頂(7月) ④ I M-Na 6

16. Pinnacle Peak (6,952m)

①フランス ②Geoges Rivier ③7月~9月、不成功 ④ I M-Na 6

17. Stok Kangri (6,150m)

①西ドイツ ②不明 ③6月~7月、登頂 ④ I M-Na 6

18. Stok Kangri (6,150m)

①西ドイツ ②不明 ③8月~9月、登頂 ④ I M-Na 6

ヒマチャル・プラディシュ・ヒマラヤ

19. CB-13 (6,264m)

①英国 ②J.S.Whaley 3名 ③CB山群の三角地帯の最高の未踏峰。6月25日にロータン・バスを越え、付近の15,000~16,000フィートの山で順応行動をしたのちタング谷氷河の末端4,572mにBCを設けた。

7月10日から登攀を開始したがE.Stelkaが6,096

mに達して退却した。Stelkaは肺水腫を起した。

④ I M-Na 5

20. Deo Tibba (6,001m)

①ポーランド (Moscovian Mountaineering Club) ②Andrzej Zboinski ③6月~7月、不成功、詳細不明 ④ I M-Na 6

21. Menthosa (6,444m)

①オーストリア ②Gunter Gruber 7名
③ミヤール・ナラから北東面新ルートをめざしたがルートが見つからずウルガス・パスからのルートに変更した。

7月27日に4,270mのBCを出発し、アルパインスタイルで7月29日に登頂、ビバークの後1日でBCにもどった。④岩と雪第81号

22. Mulkila-IV (6,517m), KR-I (6,157m)

①英国-インド合同隊 (空軍隊) ②Wing Comdr. N.M. Ridley 21名 ③8月24日にミラン・ナラの4,270mにBCを設置。26日にC1 (5,030m)、28日にC2 (5,580m)を設けた。30日、2パーティに分れて南稜から登頂を試みたが落石が多く断念、31日にE. RogersとP.N. Taylorが登頂した。

このあと、コア・ラング谷に移動し、9月8日5,244mにBCを設けた。南東稜のC1から9月14日にRogers、Taylor、R. FrancisがKR-1に登頂した。④ I M-Na 6 岩と雪第81号

23. White Sail (6,446m), Devachen (6,187m)

①オーストラリア (ニュージーランド山岳会所属)
②Peter S. Allen 6名 ③東トス氷河の4,220mにBC設置 (9月24日)、Allenら3名がラッシュアタックを敢行したが天候悪化で6,100mで断念した。(ビバーク1回)

Ed. Neve、Gary WillsはDebacheを試みたが雪が多く断念した。

この後、A. RothfieldとM. Rheinbergerが再びWhite Sailに向かい10月4日に登頂した。

Allen、Neve、Willsの3名も10月8日に登頂に成功した。④ I M-Na 6 岩と雪第81号

ガルワール・ヒマラヤ

24. Srikanta (6,133m)

①カナダ ②Dilsher S. Virk 7名 (女性2名を含む) ③Dudh Nalaの3,870mに10月1日にBCを設け、ABCはDudh氷河とSrikanta氷河の合流点4,572mに建設した。C1 (5,181m)、C2は北稜の5,638mに設け、北東稜を経て10月4日4名が登頂に成功した。C2から9時間を要した。

なお、リーダーのVirkは、1959年にDevistan '75年にSwarogrohiniなどに行っている。

④ I M-Na 5

25. Thalay Sagar (6,904m)

①アメリカ-イギリス合同隊 ②John Thackray 4名 (アメリカ人=3、イギリス人=1)

③ポータートラブルや悪天候のためキャラバンはガンゴトリから10日を費した。Kedar氷河上部の4,880mにABCを設け、ここからアルパインスタイルの登攀を開始した。ルートは北壁と西稜の間の北東クローワールにとられ、雪崩の危険にさらされながら2回ビバークし、6月19日に6,100mにキャンプを出した。

チャンガバンに似た頂上岩壁の登攀は極めて困難であったという。

9月23日、Thackray、Pete、Thexton、Roy Kligfieldの3名が登頂に成功し、ビバークの後、西稜からKedar氷河に下った。

この山は、ガルワール・ヒマラヤにおける第1級の未踏峰として知られていたものである。

④ I M-Na 5、他

26. Trisul (7,120m)

①イタリア ②Augusto Zanotti 12名 ③BCをNanda Guntiの近く4,267mに設け、南壁からの登頂をねらった。C1を5,181m、C2を5,943m、C3を6,400mに進めた。しかし、ひどい降雪のためフィックスロープがかくれ、その後嵐に見舞われたため断念した。④ I M-Na 5

27. Dunagiri (7,066m)

①フランス ②Alain Gautier 6名
③Ramani氷河の4,328m地点にBCを設けた。C2 (5,760m)、C3 (6,583m)とすすめ、6月13日と14日の2度アタックを試みたが雪の状況が悪く、また、キャンプ位置の低さもあって登頂に失敗した。④ I M-Na 5

28. Rataban (6,130m)

①ニュージーランド=インド合同隊 ②登山班は Col. Balwant Singh Sandhu、カヌー班は、Graeme Dingle (ヒラリーの“Ocean to Sky”のメンバー) 15名(ニュージーランド側は女性3名を含めて7名、インド側は女性2名を含めて8名) ③8月17日にジョシマートを出発、23日“花の谷”にBC設置。9月3日C2からDingleら4人の第1次アタックが行われたが頂上直下100mで断念した。同日、第2パーティも女性隊員1人が負傷して失敗、翌日、Capt. L. Singh、R. Buttonがフィックスを多量に使用して午後3時30分に登頂した。

9月5日、Dingleら3名(女性1名)が夜を徹して登り、6日早朝に登頂した。

このあと8人が付近の無名峰に初登頂した。

9月18日にジョシマートにもどり第2パートの河下りを開始した。

5台のカヤックカヌー(ニュージーランド製)と2台のMiwok型カヌーを使いNandakini河をRudra Prayagを経てHaridwarまで下ることに成功した。④IM-Na 5

29. Mrigthuni (6,855m)

①スペイン ②Angel Sanchez Garcia 5名 ③ムリットニ氷河の下3,900mのSukhranにBCを設け(9月13日)、氷河左岸の4,500mにABCをおいた。

9月20日から南壁にとりついたが雪崩によって1人が負傷し、23日に5,900m地点で断念した。南壁の高度差は1,600mという。④IM-Na 6、AAJ-1980

30. Bethartoli Himal (6,352m)

①スペイン ②Francisco J. Uagarte ③7月~8月、不成功、詳細不明 ④IM-Na 6

31. Changabang (6,864m)

①アメリカ ②Dakers Gowans ③8月~10月不成功、詳細不明 ④IM-Na 6

32. Dunagiri (7,066m)

①ポーランド(医学会山岳会) ②Grzegorz Benke ③8月~9月、不成功、詳細不明 ④IM-Na 6

33. Hanuman-North (6,014m)

①フランス ②Alan Gautier 6名 ③Dunagi

-riの登頂を断念したあと転進し、6月14日、4名が北東稜から登頂した。

34. Dunagiri (7,066m) Bugial Kot (5,188m)

①西ドイツ ②Deiter Sause ③Dunagiriは失敗、帰路、Reniの南にあるBugial Kot (Bugial Koti)に登頂した。9月~10月

④IM-Na 6

35. Trisul (7,120m)

①西ドイツ ②Ewald E. Ruf ③9月~10月、登頂成功、詳細不明 ④IM-Na 6

36. Trisul (7,120m)

①オーストリア ②Marcus Schmuck ③10月~11月、登頂成功、詳細不明 ④IM-Na 6

37. Vasuki Parbat (6,788m)

①英国 ②N.G. Cleaver ③East Wales Exp. 9月~11月、不成功、詳細不明 ④IM-Na 6

38. Bhagirathi-I (6,856m)、II (6,512m)、III (6,455m)

①チェコスロバキア ②Ing. Z. Lukes 11名 ③9月21日、Nandanban (4,400m)にBCを設けC1 (5,300m)からアタックした。

10月1日、Lukes、J. Strasky、J. Vithaの3名がビバーク一夜の後II峰に登頂、帰路ビバークの後BCに帰着した。

東壁を経て北稜からI峰を試みたLukesら3名はルートの困難さから北稜上の支峰(6,556m)に登り(「P. シュヴァルト・タワー」と命名した)I峰登頂を断念した。

Lukesらは10月7日II峰を試みビバークの後、8日に登頂した。

39. Bhagirathi-I (6,856m)

①フランス ②Louis Drouot ③5月~6月、不成功 ④IM-Na 6

40. Black Peak (6,316m)

①アメリカ(山岳旅行登攀クラブ) ②Talbot Bielcfeildt ③バンダール・ブンチII峰とも呼ばれる。8月~10月、不成功、詳細不明 ④IM-Na 6

41. Kedarnath (6,940m)

①ポーランド(Warsa山岳会) ②Dr. Jan Zaunar ③不成功、9月~10月、詳細不明 ④IM-Na 6

※ 補 遺

- No 31のDakers Gowans隊は、Changabang南西稜の5,791mで引返している。(AAJ-1980)
- 1978年にDevistaとDevitoliの間にあるP.6648(秋田隊が79年に初登頂)を試みたポーランド隊(Stanislaw Zigmunt Zdr-ojewski隊長ら8名)は、C2をDevitoli

とのコル(6,004m)に設け南西稜から登頂をめざしたが稜線の状況が悪く引返した。帰国後、日本隊(HAJ)、他に問合わせした結果、彼らが引返した地点は6,350mの稜線上の小岩峰であることが判明した。

※1980年の記録については、年内に特集する予定である。

原 稿 募 集

ニュース ヒマラヤ(中央アジア含む)各地の社会情勢、現地事情(入山事情)、登山隊の動勢など。

紀行 遠征、旅、トレッキング……ヒマラヤとそれをとり囲む地域のものであれば、何でも結構です。採用分には粗品を進呈致します。

日本からヒマラヤから ヒマラヤからの便り、ヒマラヤについて日頃思っていること、HAJや編集部に対する提言などもお寄せ下さい。

◎送り先〒160東京都新宿区高田馬場3-23-1-506 日本ヒマラヤ協会「ヒマラヤ」編集部



ヒマラヤ登山の専門家

SITA

並ぶものない山岳サービス

- ★ インド政府許可証
- ★ 通関手続
- ★ 交通機関
- ★ ポーター
- ★ ハイポーター
- ★ デラックス食料賄い
- ★ テント宿泊用具
- ★ マウンテンガイド

SITA WORLD TRAVEL (INDIA) PVT. LTD.

F-12, Connaught Place, New Delhi-110001, India
Cable : SITATUR Phone : 45961 Telex : 2823

日本代表

ファー イースト エンタープライゼス

東京都港区北青山3丁目6番18号 青山共同ビル

☎407-8100(代表)

インフォメーション

昭和56年度

日本ヒマラヤ協会理事会報告

1. 日時 昭和56年5月17日(日)午前9時15分
～11時30分
2. 場所 日本ヒマラヤ協会事務所
3. 出席者 山倉洋一、稲田定重、内田嘉弘、藤江幾太郎、黒川篤、小林英見
(オブザーバー) 西郡光昭、高橋亭夫、緑川恭子、細貝栄
(委任状提出者) 柴田金之助、岩水竜峰、山森欣一、角田不二、清水澄、近藤龍良、堀内立三 (欠席) 藤井毅
4. 議事
議長を山倉副会長がつとめ、総会提出全議案に関して検討し了承した。
なお、事務処理につき幾つかの提案があり、改善につとめることにした。

昭和56年度

新役員名簿

○理事

柴田金之助(会長)、山倉洋一(副会長)、
稲田定重(専務理事)、山森欣一(事務局長)、
岩水竜峰、角田不二 = 以上、常務理事
堀内立三、近藤龍良、小林英見、内田嘉弘、清
水澄、藤井毅

○監事 藤江幾太郎、黒川篤

《大阪》

山岳書フェア開催さる

場所 大阪紀伊国屋梅田店

日時 6月10日頃～8月末頃

大阪紀伊国屋梅田店において、大々的な山岳書フェアが開催されます。約600種ほどの山岳書計

約2,000点が陳列されます。

特に今回のメインは、全国的に山岳会誌、会報等(個性的、実のあるもの)をできるだけ集め、情報を必要としている読者に即売の便を計りたいということです。

トピックス

ネパール新オープンピークへの申請状況

去る4月に発表されたネパールの新オープンピークへは、未解禁時代に既に幾隊かの申請が出されている。

この申請に対して、ネパール観光省はあらためて問い合わせている。以下はそのあらましである。

Bhrikuti(6,720m) 日本

Dorje Lakpa(6,990m) 日本(3)

Gurja Himal(7,193m) イタリア

Karyolung(6,511m) 日本

Langtang Ri(7,239m) アメリカ、日本(2)

Nepal Peak(7,168m) フランス

Ohnmi Kangri(7,028m) 日本、スペイン

Phurbi Chachu(6,658m) 日本

Cho Oyu(8,153m) フランス、アメリカ、イタリー、イギリス、スペイン、ポーランド、日本

Himlung Himal(7,126m) 日本

Lhotse Shar(8,511m) イギリス、ポーランド

Roc Noir(7,485m) スウェーデン

Cholatse(6,440m) アメリカ

新刊図書一覧

- ① R・A・ニコルソン著／中村潔・訳、「イスラーム神秘主義におけるペルソナの理念」、人文書院、1981・3、226p+III、1,500円。
- ② 本多恵、「サーンキヤ哲学研究・下」、春秋社、1981・、9,000円。
- ③ 向坊隆他・編著、「東京大学公開講座—山—」、東京大学出版会、1981・3、vi、283p、1,200円、(「東京大学公開講座」32)。
- ④ リンヨン・ティッルウィン著／田辺寿夫・訳、「死の鉄路—泰緬鉄道ビルマ人労務者の記録—」毎日新聞社、1981・3、379p、1,300円。
- ⑤ 長崎暢子、「インド大反乱—1857年」、中央公論者、1981・3、232p、480円、(「中公新書」606)。
- ⑥ 都竹武年雄、「蒙古高原の遊牧」、古今書院、1981・3、230p、1,300円。
- ⑦ —、「インド憧憬」〔伝統と現代〕第70号、伝統と現代社、1981・3、800円、(雑誌の特集号)
- ⑧ 松本亮、「マハーバーラタの蔭に—続ジャワ影絵芝居考—」、ワヤン協会、1981・、
- ⑨ 小西正捷、「多様のインド世界」、三省堂、1981・3、293p、1,800円、(「人間の世界史・第八巻」)。
- ⑩ 木村雅昭、「インド史の社会構造」、創文社、1981・2、3、530、14p、7,000円。
- ⑪ 黄就順・著／山下龍三・訳、「中国現代地理—その自然と風土—」、帝国書院、1981・1、534p、4,500円。
- ⑫ 上村勝彦、「インド神話」、東京書籍、1981・3、286p、写真、1,800円。
- ⑬ 三杉隆敏、「私のイスタンブール」、六興出版、1981・3、222p、1,500円。
- ⑭ 蔵原惟人・監／川本邦衛・松山納・編訳、「世界短編名作選・東南アジア編」、新日本出版社、1981・3、328p、1,300円。
- ⑮ 伊藤清司・編訳／森雅子・訳、「中国の民話—錢塘江の高潮退治—」、大日本絵画、1981・3、292p、8p、1,800円。
- ⑯ ジョアン・デ・パロス・著／池上岑夫・訳／生田滋・訳注、「アジア史(二)」、岩波書店、1981・3、xi、499p、30p、5,600円、(「大航海時代叢書・第Ⅱ期」第3巻)。
- ⑰ 下店静市、「下店静市著作集・第一巻(芸術史からみた東西文化交流史)」、講談社、1980・9、図版+386p、6,800円。
- ⑱ 井原徹山、「印度教」、大東出版社、1981・2、写真、3、4、16、600p、7,800円、(第三版。中村元のあとがき付)。
- ⑲ キプリング他著、「世界動物文学全集・第29巻」、講談社、1981・3、
- ⑳ 浜野安宏・文／内藤忠行・写真、「地域風俗曼陀羅」、神戸新聞事業社・発行／神戸新聞出版センター・発売、1981・3、243p、2,900円、(写真集、ラダーク・カシミール・ネパール・インド etc)。
- ㉑ 長尾宏也／著、深田久弥・序、「山の隣人」、本耳社、1981・3、248p、5,500円、(昭和10年竹村書房版の復刻版)。
- ㉒ 杉本光作、「私の山・谷川岳」、中央公論社、1981・4、353p、1,400円。
- ㉓ 瀬戸内寂聴、「ブッタと女たちの物語」、講談社、1981・4、237p、980円。
- ㉔ 岡部牧夫・岩間雅久／著、「人が野山を歩くとき」、評論社、1981・4、254p、1,400円、(「野外への扉・1」)。
- ㉕ 平山郁夫、「平山郁夫自選画集」、集英社、1981・4、186p、別丁貼込カラー口絵一丁(B3版変型)148,000円。
- ㉖ N・ディーレンフェース他著／西堀栄三郎・宮下啓三・日本語版監修、「図説百科・山岳の世界」大修館書店、1981・、18,000円。
- ㉗ 石井溥、「ネワール村落の社会構造と其の変化—カースト社会の変容」、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、1980・12、336p、非売品(国費刊行物)。

日本ヒマラヤ会議集会報告

札幌会場

活発な質疑、夜の部も盛会

4月5日(日)

大通り公園には厳しかった冬をしのぼせる黒ずんだ雪が残っていたが道路には土ぼこりが舞い、春の息吹きが感じられた。

会場の札幌市社会教育センター会議室は、テレビ塔近くのバスセンターの一階。まとまりのよいことでは定評のあるH A J北海道グループが中心とあって、会場はほぼ満杯の35名の参加者となった。午前10時に開会、世話人の中川氏の司会で、大崎評議員のあいさつ、稲田専務理事の主催者あいさつのもと会議日程に入った。

内容のあらまは次のとおりである。

<登山・トレッキングに関する最新事情＝稲田定重氏>

ネパール、インド、ブータン等に関して、国内の一般政情、隣接諸国との関係などから話題に入った。それらが我々の登山やトレッキングにどのような影響を及ぼしているのか、或いは、将来どのような方向に動き、影響がもたらされるかなどについての話であった。

登山の世界が決して切り離されたものではなく、政情などと不可分に関わっていることが理解された。

ついで、各国の登山事情と地域事情、レギュレーション、解禁の動きなど、登山・トレッキングそのものに関する実情や動き、方向の話があった。ネパールにおけるトレッキング許可で登れる山の

問題点にもふれた。

<ヒマラヤをどう登るか＝小西政継氏 13:00～16:15>

わが国の登山界にあって現役として常に最先鋭の実践を継続されている山学同志会の小西氏を会議の講師に迎えたことは本会議の意義を更に高めるものであった。

1969年日本山岳会のエベレストにはじまり、80年カンチェンジュンガ北壁にいたる氏の数々の遠征の中で培ってきた実践的タクティクス、理論は参加者にとって感銘深いものがあった。

同志会における会員養成の方向は常に最強の登山者の育成をめざしていること、基礎的な体力・技術・意思力の蓄積の度合がその者の伸びる限界を規定してしまうことなど、説得力ある話がなされた。

氏のユーモアたっぷりな肩ひじ張らない、しかし、豊かな示唆に富んだ話は、遠征裏話と合わせて時間を忘れさせた。

タクティクスに関する突っこんだ質問、あるいは氏の考えについての質問なども沢山出された。しかし、氏からの本当の話は、居酒屋に会場を移した夜の部において出されたようで、参加者一同大いに酒量をあげることになった。

なお、この会議開催にあたって、大崎さん、中川さん、阿部さんをはじめとするH A J北海道グループの皆さんには大変お世話になりました。

カンチ通信 No.4

4月11日 天候が崩れてきました。ヤルン谷下流に雲が湧き出すと午後には雪となります。登山は本隊々員の順化期間に入っていますので、先端は伸びません。

4月12日 C1への登路は、そのほとんどがベースキャンプから望見することができます。隊員、シェルパで10数名が行動しますと、ルート上には点々と途切れることなく人影があり壮観です。夜は今後の予定についてミーティングです。

4月13日 特選隊の山田パーティはABC(C3約7,300m)のグレートシェルフに入りました。日本からのメールが届き、ベースキャンプは戦場のようです。いつもながら遠いヒマラヤの高所に届く日本からの便りは嬉しいものです。しかし、困ったことに一通も届かないメンバーもいます。現在、当隊には3名がおります。

4月14日 いよいよ主峰側、ヤルン・カン側と分かれてルート伸ばす段階に入ってきましたので、隊長、副隊長、縦走隊長と3名にて詳細な打合わせをした結果、ファイナルキャンプへの到達は、一回にして、休養後アタックに入ることになりました。徐々に不調者が出て、パーティ編成も少しずつ変わって行きます。グレート・シェルフ(7,300m)までは、なるべく多くのメンバーに均等の機会を与えるため、不調者も途中で止めることなく順化期間を与えていますが、作戦の後半になると、どうしても一回調子を崩した者は、ローションから外れていかざるを得ません。この辺も高所登山の難かしいところです。

4月15日 山田パーティが、ヤルン・カン側C4(7,800m)に到達。「鎌」と呼ばれている大きな雪田を横切った形でヤルン・カン頂上に直接つき上げている大ルンゼの末端です。

4月16日 普通の登山ですと、このC4設営すれば、もう頂上に立つことは時間の問題です。事実昨年メキシコ隊は、この下のC4から頂上へアタックしています。(もっとも3名のうちシェルパ1名のみ生還し隊員2名は行方不明となりましたが)しかし、我々のような、トラバースをしようとする隊にとっては、これからが正念場です。

4月17日 一日中降雪と強風が吹き荒れました。雪は湿雪で暖かく不気味です。山田パーティに代わって尾形パーティが最先端に出ましたが、内1名が軽い凍傷になっていました。

4月18日 今日一日降雪。湿雪である。ラジオ放送によれば昨日首都カトマンズにも35mmの雨が降ったとかで、この雪も偏西風の影響かと考えられます。

4月19日 2日間のラッセル(ヒザ上)の末、尾形パーティはヤルン・カン側C4(WC4)7,800mに到着。C3では1回だけ3人で1本の睡眠用酸素を吸うことが出来ます。夜には、アタック前までの再編成チームを発表しました。

4月20日 強い西風が吹きましたが久し振りに晴れました。尾形パーティによってWC4(7,800m)を建設。3人はそのまま入りました。困ったことに、ジェネレーターが2台とも不調となり、カトマンズとの交信も絶えてしまいました。

4月21日 今登山で一番の快晴。尾形パーティは、ヤルン・カンの大ルンゼに入り遂にファイナルキャンプ予定地(約8,200m)に到達。フィックス仕事を終了しました。このEXPで初めて8,000m台に到達。しかも、ヒザ上のラッセルと云う困難な状況の下でした。明日は主峰側C4へ山田パーティがルート工作の予定です。

雪崩絶えないBCより(山森・記)

4月22日 尾形パーティに代わり主峰に向かった山田パーティはC4(7,850m)予定地までのルート工作を終了。

4月23日 山田パーティは、C4を設営し更にC5へ向けて5Pルート工作。

4月24日 山田パーティは約8,300mの地点に達しここをC5予定地とした。トップの片岡のみ酸素を吸い、山田、藤倉は、酸素なしでそれぞれボンベ1本を上げる。

4月25日 交差縦走として両ピークから各2名が縦走、これをサポートして両ピークに各3名が登頂するというプランですが、合計10名が酸素を吸って同時行動する予定なのですが、これに必要なエコノマイザーが11個行方不明になりました。

大問題です。

4月26日 3日間続いた好天も24日から雪となり、ルートも埋ってしまいました。この日はヤルン・カン側C5へ飛田チームが酸素なしで10kgの荷上に向かいましたが、7Pでダウン。無念の涙をのみました。主峰側C5へ保坂パーティが向かいましたが、2名が酸素を吸ってルートフィックス、1名が無酸素でボンベ1本を荷上げしました。このところの雪でフィックスのある所はヒザ上のラッセルで堀り起しが大変です。8,000mを越えての深いラッセルに悩まされています。

4月27日 昨日無酸素で8,000m上の荷上げをした飛田隊員が腹痛から体調を崩しC2泊り。上部で行動した6名がラムゼーに休養のため下りました。八木原パーティの2名は、酸素を吸って昨日飛田パーティのデポした荷物をC5へ荷上げ。

4月28日 両C5へ最後の荷上げのためシェルパ6名が両C4へ入った。

4月29日 シェルパの2チームはそれぞれのファイナルキャンプへ各6本の酸素ボンベを荷上げてくれました。これでほぼ交差縦走態勢が整った訳ですが、これ以後アタック隊が上部キャンプに入るまで1週間の期間があきますのでこの間にルートが雪に埋もれてしまう公算が大となり心配しています。

4月30日 当初体調を崩したメンバーは、組まれたローテーションに従わざるを得ませんので、隊の最前線に出れなくなりました。その4名が、今日から上部キャンプに向かいます。

5月1日 ラムゼーやTP、Cに休養に下っていた14名の隊員がB.Cに戻りにぎやかです。リーダー会を開いて、最終のアタック態勢を協議しました。4時からはメンバーの発表です。縦走者として指命された4名。それをサポートして順調であれば登頂者になる6名。これ以外のメンバーも最終段階のサポートとしてそれぞれ上部キャンプ入りをして縦走を助けることになります。

5月2日 明日のアタック移動に備えて、囲炉裏のあるダイニングでは、靴の手入れ、両方の頂上に立てる測量用ポールの準備に余念がありません。

5月3日 ABCからC4への最後の荷上げに向かった隊員4名シェルパ2名は、ABCのすぐ上の壁で雪崩に遭遇してシェルパ1名が負傷しました。このEXPで初めての事故です。負傷の程度はたいしたことはありませんでしたが、このためC4への荷上は翌日に延ばしました。

アタック隊10名は上部キャンプへ向けてB.Cを発って行きました。

5月4日 昨日、雪崩にあったパーティーによるC4への荷上は結局、キャンプへとどかず途中にデポされることになりました。

5月5日 学術班4名がベースキャンプに勢揃いしました。

5月6日 昨夜来の積雪が約10cm(B.C)ABCでは40~50cmで、アタックに向かうかどうかで意見が分れました。隊長の私は本日C4入りを希望しましたが、現場の意見は圧倒的に待機です。結局この日は待機となりました。

5月7日 アタック隊はC4へ移動しましたが、先日デポした酸素ボンベ等はすべて雪崩によって流失してしまいました。C4もしばらく留守にしていたため倒壊してしまいました。デポ品を整備した結果、主峰側は被害なし。ヤルン・カン側は酸素ボンベ1本が空になっていました。これでヤルン・カン側は4本の酸素ボンベで今晚と明日をやりくりしなければならなくなりました。

5月8日 酸素を吸って快調な主峰側隊員は午後1時にはファイナルキャンプ2張を設営して入りました。5人で4本の少ない酸素しかないヤルン・カン側は午後7時ようやくテントを張り終えたのでした。

5月9日 アタック日。それぞれのファイナルキャンプは午前4時スタートで、酸素を吸いながら頂上に向かいました。本日は絶好の登攀日和。しかし、両隊共、8,300mを越える高みでヒザ上のラッセルに悩まされています。主峰側はついに頂上に着く前に2人の酸素が切れましたが、頑張って11時50分遂に頂上に立ちました。早速、測量用ポールが頂上の左7mに建てられ、コーナータ地で待機していた学術班によって確認されました。

ヤルン・カン隊は、12時30分頂上に立ちまし

た。いづれもファイナルキャンプから約8時間と云うアルパイトを強いられた訳です。ヤルン・カンの頂上にも測量用のポールが建てられました。さしもの好天もこの時にはガスを供って頂上付近は見えませんでした。その後ガスの切れ間から学術班によってこのポールも確認されました。

さて、縦走です。しかし、さしもの猛者達にとっても、このアルパイトで、これから未知の稜線をトレースすることは大変なことです。隊長の私は万感の想いを断ち切って「縦走中止」を決定しました。それぞれの頂上で泣声が上がります。しかし、8,500mの高みで勝ちのない賭はしたくありませんし、何よりも「後悔しない」ことをこの登山の中では貫いて来たのです。

下降は苦しいものです。この原稿を書いている午後8時現在、ヤルン・カン側の5名とサポートに出た隊員2名はABCに帰っていません。

「8,500mの高みでのトラバース」と云う男の否、岳人のロマンに賭て来た多くのメンバーにとってのこの5年間の総決算（否半決算かも知れませんが）は、それぞれのメンバーの胸中で計かってもらう以外に術はありません。

モンスーンの襲来を告げる背高雲の湧き立つ中を8,500mの高みから下山する若者達は、きっとこの5年間のトラバースへの生みの苦しみを引き継いで新鮮でロマン湧れるヒマラヤ登山を実践してくれるでしょう。

夏の訪れを感じるベースキャンプにて
(山森・記)

◎登頂者名

〔主峰〕保坂、山田、藤倉、片岡、鈴木(茂)、ニマ・テンバ
〔ヤルン・カン〕八木原、尾形、飛田、八嶋、角田

カンチェンジュンガ学術隊

ヤルン・カン、カンチ

主峰頂上測量に成功

五百沢智也氏を隊長とする学術部門第1次隊から届いた通信によると、見事両峰の測量に成功したという。

ヤルン・カン、カンチェンジュンガ主峰をヤルン氷河の基点から測量し、これを直接水準測量路線と結合することによって正確な高度を出すことは、登山史上の興味ばかりでなく学術的にも画期的な意義を持つことである。今回の第1次隊の主目的の一つはこの頂上測量にあったわけである。

測量用ポールは長さ2mで、登山隊によってアタック日の5月9日、登頂と同時に頂上にセットされた。

ヤルン・カンでは真の頂上に、また、主峰は頂上から7m離れたところに設置された。

主峰の真の頂上に設置しなかったのはこれまでの慣例にしたがって登山隊も頂上を踏まなかったためである。(カンチ主峰は地域住民にとって神聖な山であり、頂上を踏むことは許されていない)設置されたポールには標識旗が結びつけられ視準を容易にした。

ヤルン氷河末端でこの瞬間を待ち構えていた学術隊は、トランシットで測量するとともに超望遠レンズを設置したカメラでの撮影に成功した。ヤルン側頂上は一巨雲に隠れ気をもまされたが時間を利用してとらえることができた。

ただでさえも苦しいアタック隊が予定通りポールを設置したことは高く評価されよう。登山と学術とのコンビネーションプレーとして世界的にめずらしい事例であろう。

また、登頂隊とポール、フラッグを写真と測量でとらえたことは世界最初と思われる。

隊長の五百沢氏からの便りには「とてもゆたかな気持です」と書いてあった。

しかし、学術隊にはこれから氷河流動量の調査や氷河地図の作成、地形分類調査、航空調査など盛りたくさんの仕事がひかえてある。何よりも直接水準点と今回の測量ポイントを結ぶ直接水準測量が残されている。

昭和56年度

日本ヒマラヤ協会通常総会報告

本年度は、総会の時期をいつもより遅らし、緑濃い青山のアジア会館をはじめ使いました。当日は肌寒いくらいの雨もよりの天候でしたが、次のような経緯で無事終了しましたので報告します。

1. 日時 昭和56年5月17日(日)午後1時20分
～2時45分
2. 場所 アジア会館会議室(東京)
3. 出席者 本人出席17名、委任状提出者297名、
計313名。(定款第25条の規定により
1/3以上の出席により成立)

4. 順序

- 1) 開会 山倉副会長が開会を宣し、柴田会長
に代ってあいさつした。

「カンチェンジュンガ学術遠征隊は縦走を断念したもの、ヤルン・カン、主峰の登頂に成功した。しかし、一般会務がかなりおろそかになり、会員サービスが不十分だったことを反省している。56年度は内容の充実に力を注ぎたい」

議長には定款の定めるところにより山倉副会長があたり、書記に緑川恭子さん(事務局職員)、議事録署名人に高橋亭夫氏、中垣淑子氏を選んで議事に入った。

2) 議事

各号に関して稲田専務理事より説明がなされ質疑に入った。

- ①議案第1号 昭和55年度事業報告について
別紙報告を異議なく承認した。55年度は、カンチェンジュンガ特別事業の遂行に相当のエネルギーが割かれ、一般事業を完全に実施し得なかったことは反省を要する点であった。
- ②議案第2号 昭和55年度収支決算報告について
黒川、藤江両監事による監査報告のあと審議に入り、異議なく承認した。

③議案第3号 昭和56年度事業計画について

56年度は、一般事業の充実ときめ細かい会務運営をとおして会員への奉仕面を向上させることに最重点を置くこと、また、「ヒマラヤ研究所」を具体化して本会活動の一方の柱とすることなどの説明があり質疑を行なった。

情報サービスの実情、今後の方法について質問があり、これに対して情報問い合わせはぼう大な量にのぼっていること、将来は、ヒマラヤ研究所を軸にして能率的なシステムを作っていく(コンピューター導入など)ことの説明があった。

その他、特になく承認した。

④議案第4号 昭和56年度収支予算について

別紙のとおり一般会計、特別会計予算の提案があった。入会者は120名(55年度実績116名)を見込んでいる。

なお、カンチェンジュンガ特別事業は独立的に対応するものとして計上しなかった。

事務局員給与および役職員の旅費が不十分ではないかとの指摘があった。職員給与については確かに充分でないが予算規模上やむを得ないこと、旅費については管理費以外に各事業費の中でみていることの説明があった。

その他異議なく了承した。

⑤議案第5号 定款の一部改定について

本会定款第5条の末尾に「なお、会費には雑誌「ヒマラヤ」の購読料を含むものとする」という字句を追加することが提案された。

理由として「ヒマラヤ」が第3種郵便物扱い

であり、不特定多数を対象とする“雑誌”とみなされるものなので郵政の指導に沿った改定である。

特に問題はないので異議なく承認した。

⑥議案第6号 役員改選について

本年が理事、監事について全員の改選期にあたっている。社団法人化が間もなく予定されていることから（法人設立許可時の役員の任期はその年度内となっている）現在の役員体制をそのまま提起し、全員が再選された。新役員の氏名は別項のとおりである。

5. その他

なし。

（閉会 14時45分）

※ 総会終了後、同会場において、中垣淑子さんのスライドを使っての報告「ザンスカールの山と人」を15時40分まで行なった。

ザンスカールはあまり入った人もなく、ひじょうに興味深い民俗や風物が残されているところである。

和やかな質問も加えて楽しい時間を過した。

昭和55年度事業報告書

自 昭和55年 4月 1日

至 昭和56年 3月 31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集整理・保存およびそれらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

昭和56年度より「日本ヒマラヤ研究所」へ全面移管を前提として下記の事業を行なった。

1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・遠征計画の企画・立案等の指導。

2) 文献・諸資料のレファレンスサービス（電子複写）

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

設置のため下記の基礎的検討を行なった。

- 1) 施設・設備の設置と運営計画の策定。
- 2) 文献調査と調達開始。
- 3) 研究および情報管理システムの検討。
- 4) 財務渉外。研究所の設置運営に必要な財政基盤確立のため、資金導入について交渉した。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

- 1) 専門研究会活動の再編強化と会員登録。
ブータン研・チベット研・東部ヒマラヤ研・ラダック研・ワハン研・宗教研・地図研等の既存研究会の強化を図るべく努めた。
- 2) 事故防止対策の研究と調査。
遭難防止対策および事故調査についてまとめて発表した。

2. 出版事業（研究・報告）

- 1) カンチェンジュンガ仮報告書の発行（55年カンチェンジュンガ偵察隊）
- 2) 年報第1号発行

3. 関連学術事業

東部ヒマラヤ調査を計画したが中止。

III. 定款第4条第3項にもとづく事業（ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査などの団体の派遣）

1. カンチェンジュンガ学術遠征隊派遣事業

21名の本隊を56年2月に派遣し、登山活動を実施中。また5名の学術隊（第一次）を派遣ネパール政府の後援のもとに学術調査を実施中。55年2月から偵察隊（7名）を派遣した。

2. 高所登山事業

1) サセル・カンリ（7,672m）遠征の具体化。
56～58年度3ヶ年事業で実施、本年度は、許可取得のためインド側との渉外およびジョイントの交渉を進めた。

2) ガネッシュ・ヒマールII峰（7,172m）隊の派遣準備。

56年8月派遣を予定して実務準備をすす

めた。

- 3) 登山許可申請および取得。
パンディム(シッキム)その他について、
56年プレ以後の計画準備と渉外。

- 4) ポストカンチェンジュンガ計画の樹立と
渉外。
中期計画によるカンチェンジュンガ遠征
終了後の次期計画の構想樹立と調査・渉
外活動を開始した。

3. 野外活動事業(セミナートレッキングを除く)

- 1) ムスタン王国(ネパール)踏査隊派遣。
秘境といわれるムスタン王国に10名の隊
を56年9～10月に派遣し広範囲の調査と
登山を実施するため報道機関と提携し、
渉外を進めた。

IV. 定款第4条第4項にもとづく事業(機関誌そ の他の刊行物、登山・野外活動訓練事業、研 修、各種の会合によるこの分野の健全な発達 をはかるための指導・啓もう活動)

1. 機関誌発行事業

「ヒマラヤ」第102号～113号の発刊(第
3種郵便物扱、毎月1日発行、毎号24～
28ページ)

2. 出版事業

- 1) 年報「HIMALAYA」第1号発行(1
月)および第2号編集。
- 2) 英字誌「ザ・ジャパニーズ・ヒマラヤン
・ジャーナル」第1号の発行準備。(57
年初めに第1号発行予定)

3. ヒマラヤ登山学校事業

- 1) 第4回ヒマラヤ登山学校の実施。
インド・ケダルナート(6,940m)にイン
ストラクター3名を含めて20名を9月～
10月(29日間)に派遣し、19名がケダ
ルナート・ドーム(6,830m)に登頂した。
- 2) 第5回ヒマラヤ登山学校の準備・訓練。
ナンダ・カート(6,611mインド)へイン
ストラクター4名を含む13名を派遣する
計画で、隊編成と訓練および実務準備を
推進中。
- 3) 第6回ヒマラヤ登山学校許可取得と隊編

成。クン(7,075m)許可内定。

4. 野外活動事業(セミナートレッキング)

- 1) 第2回セミナートレッキング隊派遣。
ネパール・ヒマラヤ、ロールワリン地域へ
20名(インストラクター2名含む)を12月
～57年1月(21日間)に派遣すべく計画
中。
- 2) 56年4月～5月、カンチェンジュンガ地
域へ20名を派遣すべく準備を進めたが
中止。

5. 指導・啓もう事業

- 1) 日本ヒマラヤ会議の開催。6月～56年3
月、仙台・松本・高知・福岡・札幌で、
日山協との連携のもとに実施した。各会
場30～50名。
- 2) 地域ヒマラヤ集会の開催。水戸・長崎で、
情報を中心に実施、各会場20名～30名。
- 3) 定例集会。東京(毎月)・札幌(隔月)
・名古屋で毎回のテーマにもとづいて開
催した。
- 4) 小集会。各地で、要請および必要に応じ
て開催した。
- 5) インド・ヒマラヤ研究集会。インド登山
財団総裁H・C・サリーン氏を迎えて行
う予定であったが氏の公務多忙のため中
止。
- 6) 第2回インド・ヒマラヤ会議の開催
旧インド・ヒマラヤ情報交換会。55年隊
の報告および56年隊の計画検討・研究。
11月(前橋)70名参加。
- 7) 公式報告会 ヒマラヤ登山学校隊(11月)
スライドおよび映画。
- 8) 壮行会。各隊について、出発1ヶ月前に行
なった。計画発表と地域事情伝達。

V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他、 前条の目的を達成するために必要と認める事 業)

1. 国際交流事業

- 1) 外国代表の招請。インド登山財団総裁H
・C・サリーン氏を招請し、パーティ、
懇談会および研究会を開催すべく渉外を
進めたが中止となった。

- 2) 代表派遣。ヒマラヤ諸国に代表を派遣し、各国関係機関・団体との交流を行なう予定で準備した。(4月に派遣)
- 3) 各国山岳団体・機関との情報提携。英・米・仏・スイス・カナダ・ニュージーランド・スペイン・ポーランド・ドイツ・チェコ・オーストリアその他と機関誌交換および情報提携を行なった。

2. 国内関連団体との協調

日本山岳協会、その他関係団体と事業提携・協力・情報交換などを行なった。

3. 組織の整備

- 1) 社団法人設立許可申請。55年7月に設立許可申請書を提出した。
- 2) 基本財産の充実。引き続き拠出金を募集した。
- 3) 執行体制の強化。専任事務局員1名の増員を図った。

4. その他

- 1) 運営諸規程・規則等の整備。法人として必要とされるものの整備。
- 2) 事務整理。事務処理方式の合理化。

昭和55年度収支決算報告

自 昭和55年 4月 1日
至 昭和56年 3月 31日

I. 一般会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用収入			(450,000)	(244,665)	(△205,335)
		基本財産利息収入	450,000	244,665	
入会金収入			(600,000)	465,000	(△135,000)
		入会金収入	600,000	465,000	
会費収入			(4,900,000)	4,766,660	(△133,340)
		通常会員会費収入	4,500,000	4,566,660	
		賛助会員会費収入	400,000	200,000	
事業収入			(9,670,000)	(13,605,779)	(3,935,779)
		情報管理事業	30,000	25,495	
		調査研究事業	20,000	53,000	
		登山学校事業	1,800,000	10,902,229	
		高所登山事業	80,000	20,000	
		野外活動事業	2,000,000	37,000	
		指導啓もう事業	2,600,000	1,107,500	
		機関誌発行事業	1,010,000	827,115	
		出版事業	1,500,000	394,340	
		関連学術事業	100,000	41,100	
		国際交流事業	480,000	100,000	
		その他事業	50,000	98,000	
雑収入			(104,000)	(164,550)	(60,550)
		受取利息収入	30,000	36,743	
		賃貸料収入	24,000	3,000	
		その他雑収入	50,000	124,807	

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
繰入金収入			(1,215,000)	(380,713)	(△834,287)
		特別会計繰入金収入	1,200,000	349,600	
		別途会計繰入金収入	15,000	31,113	
前期繰越収支			(1,397)	(1,397)	
差額収入			1,397	1,397	
計			16,940,397	19,628,764	2,688,367

支出の部

(単位 円)

勘定科目	大科目	中科目	予算額	決算額	増・減(△)
管理費			(7,012,000)	(7,180,462)	(168,462)
		給料・手当	3,000,000	3,505,550	
		旅費交通費	350,000	102,700	
		通信運搬費	180,000	241,100	
		電話費	300,000	475,910	
		文具費	150,000	67,825	
		消耗品費	50,000	33,296	
		営繕費	30,000	2,000	
		什器備品費	500,000	377,974	
		印刷製本費	650,000	910,756	
		図書費	50,000	34,150	
		貸借料	1,200,000	1,096,800	
		光熱水費	100,000	111,260	
		会議費	105,000	63,700	
		諸税会費	60,000	10,000	
		交際費	30,000	10,000	
		広報費	90,000	86,471	
		福利厚生費	50,000	0	
		法人諸費	50,000	21,300	
		手数料	17,000	7,310	
		諸謝金	20,000	0	
			30,000	22,360	
事業費		事業費	(8,790,000)	(11,704,955)	(2,914,955)
		情報管理事業費	50,000	21,100	
		調査研究事業費	100,000	80,000	
		登山学校事業費	1,180,000	8,482,271	
		高所登山事業費	40,000	20,000	
		野外活動事業費	1,240,000	37,000	
		指導啓もう事業費	1,950,000	994,994	
		機関誌発行事業費	1,900,000	1,708,540	
		出版事業費	1,100,000	184,950	
		関連学術事業費	300,000	1,920	
		国際交流事業費	900,000	174,180	
		その他事業費	30,000	0	
繰入金			(700,000)	(730,000)	(30,000)
		退職引当金繰入金	200,000	200,000	
		別途会計繰入金		530,000	
		研究所会計繰入金	500,000	0	
予備費			(400,000)	(0)	(△400,000)
		予備費	400,000	(0)	
次期繰越収支			(38,397)	(13,347)	(△ 25,050)
差額		次期繰越収支差額	38,397	13,347	
計			16,940,397	19,628,764	2,688,367

II. 基本財産会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
基本財産運用利息	450,000	244,665	△ 205,335
指定寄附金収入	2,400,000	0	△2,400,000
法人化拠出資収入	450,000	126,000	△ 324,000
終身会員収入	1,670,000	312,920	△1,357,080
雑収入	1,000	0	△ 1,000
前期繰越収支差額	6,619,830	6,619,830	0
計	11,590,830	7,303,415	△4,287,445

支出の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金支出	450,000	244,665	△ 205,335
雑 費	30,000	0	△ 30,000
次期繰越収支差額	11,110,830	7,058,750	△ 4,052,080
計	11,590,830	7,303,415	△ 4,287,415

Ⅲ 別途会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
別途積立金運用利息	15,000	31,113	16,113
一般会計繰入金収入	200,000	730,000	530,000
前期繰越収支差額	498,875	498,875	0
計	713,875	1,259,988	546,113

支出の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金支出	15,000	31,113	16,113
特別会計支出金		1,020,000	△ 490,000
次期繰越収支差額	698,875	208,875	△ 490,000
(退職給与引当積立金)	(200,000)	(200,000)	0
(運営基金)	(498,875)	(8,875)	(△ 490,000)
計	713,875	1,259,988	546,113

Ⅳ ヒマラヤ研究所特別会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	金額	決算額	増・減(△)
一般会計繰入金収入	500,000	0	△ 500,000
会 費 収 入	100,000	0	△ 100,000
寄 附 金 収 入	1,500,000	0	△ 1,500,000
助 成 金 収 入	5,000,000	6,000,000	1,000,000
雑 収 入	50,000	0	△ 50,000
計	7,150,000	6,000,000	△ 1,150,000

支出の部

(単位 円)

勘定科目	金額	決算額	増・減(△)
管 理 費	1,530,000	0	△ 1,530,000
初 年 度 調 査 費	1,200,000	0	△ 1,200,000
事 業 費	4,300,000	6,000,000	1,700,000
特別事業調査研究費	0	(6,000,000)	
計	7,150,000	6,000,000	△ 1,150,000

総括収支計算書

(カンチ特別会計を含めず) (単位 円)

収入の部		支出の部	
種 別	金額	種 別	金額
入 会 金 収 入	465,000	一 般 会 計 管 理 費	7,180,462
会 費 収 入	4,653,860	一 般 会 計 事 業 費	11,704,955
会 事 業 収 入	13,605,779	ヒマラヤ研究所支出	6,000,000
雑 収 入	156,113	別 途 会 計 支 出	1,020,000
基本財産運用収入	244,665	雑 費	0
寄 附 金 収 入	426,000	一 般 会 計 予 備 費	0
助 成 金 収 入	6,000,000	小 計	25,905,417
終 身 会 員 収 入	312,920		
特別会計繰入金収入	349,600		
そ の 他	169,750		
前期繰越収支差額	7,120,102	次 期 繰 越 収 支 差 額	7,298,372
	33,203,789		
計	33,203,789	計	33,203,789

貸借対照表

昭和56年3月31日現在 (単位 円)

借 方		貸 方	
現 金	81,977	預 り 金	0
普 通 預 金	2,034,949	前 受 会 費	17,400
金 銭 信 託	1,000,000	備 品 等 見 返 勘 定	3,847,796
郵 便 振 替	2,941,500	特 別 積 立 金	0
有 価 証 券	1,024,946	敷 金 ・ 加 入 権	400,300
備 品	215,000	別 途 積 立 金	208,875
登 山 装 備	1,870,796	基 本 財 産	7,058,750
電 話 加 入 権	1,977,000	未 収 会 費	193,750
未 収 金	320,000	指 定 寄 附 未 収 分	3,600,000
	80,300	機 関 誌 未 収 分	465,000
	4,858,750	小 計	16,391,871
計	16,405,218	次 期 繰 越 収 支 差 額	13,347
		計	16,405,218

財産目録

昭和56年3月31日現在 (単位 円)

種 別	摘 要	金 額
1. 現 金	手 元 現 金	(81,977)
2. 普 通 預 金	三菱銀行新宿支店 4455421	50,978
	東商信用金庫 63468	28,135
	第一勧業銀行高田馬場支店 1099791	47,650
	住友信託銀行新宿支店 5136696	261,101
	住友銀行新宿支店	75,632
	富士銀行高田馬場支店 593803	9,347
	東邦銀行富岡支店	1,562,106
3. 定 期 預 金		(1,000,000)
	三菱銀行	1,000,000
4. 金 銭 信 託		(2,941,500)
	住友信託銀行新宿支店	
	12285 127768	2,941,500
	127769 127770	
5. 郵 便 振 替		(1,024,946)
	東 京 0-48954	988,248
	東 京 6-164655	36,698
6. 有 価 証 券		(215,000)
	航空券(東京-ニューデリー-往復)	215,000
7. 未 収 金		(4,858,750)
	終身会員申込者未収金	793,750
	指定寄附金申込者未収金	3,600,000
	機関誌広告料未収金	465,000
8. 敷 金		(320,000)
	淀橋食糧ビル 506 号敷金	320,000
9. 電 話 加 入 権		(80,300)
	電話加入権 (03-367-8521)	80,300
10. 備 品		(1,870,796)
	協会事務所備品	1,870,796
11. 登 山 装 備		(1,977,000)
	在インド(ニューデリー)登山装備一式	1,377,000
	在ネパール(カトマンズ)登山装備一式	600,000
	資 産 合 計	16,405,218
12. 前 受 会 費		(17,400)
	56年度会費	17,400
13. 未 払 い 金		(780,000)
	共立工業(封筒等印刷費)	100,000
	石倉印刷(年報印刷費)	680,000
	負 債 合 計	797,400
	差 引 正 味 財 産	15,607,818

備品明細

品名	数量	評価額	備考
宛名カードケース	2	70,000	
宛名印刷機	1	120,000	
英文タイプライター	1	60,000	
英文タイプライター	1	28,000	
スライドプロジェクター	1	30,000	
丸いす	10	50,000	
スチール机	1	80,000	
スチール・キャビネット	1	120,000	
スクリーン	1	20,000	
小型テープレコーダー	1	13,780	
掃除機	1	13,040	
和文タイプライター	1	212,696	
会旗		69,000	
折たたみいす	15	45,000	
片そで机・いす	2	31,000	
両そで机・いす	1	22,000	
ファイリング・キャビネット	1	10,000	
書庫	1	25,000	
テーブル	2	22,000	
書だな	2	13,000	
レターケース	1	12,000	
ガスストーブ	1	14,900	1
茶たんす	1	16,700	
ふとん	2	17,100	
電子リコピー	1	710,000	
タイプスタンド2型	1	11,250	
黒板	1	11,475	
ペーパーカッター	1	10,875	
ホワイトボード	1	12,000	
計		1,870,796	
登山装備一式	一式	1,977,000	
計		1,977,000	
合計		3,847,796	

昭和56年度事業計画書

自 昭和56年 4月 1日
至 昭和57年 3月31日

I. 定款第4条第1項にもとづく事業（ヒマラヤに関する総合的な資料と情報の収集・整理・保存およびそれらの利用希望者に対する便宜供与）

1. 情報管理事業

「日本ヒマラヤ研究所」の機能と連携して

- 1) 会員内外に対する情報提供とトレッキング・踏査・登山計画の企画・研究等の指導。
- 2) 文献、諸資料のレファレンスサービス（電子コピー）

2. 日本ヒマラヤ研究所設置事業

助成金を得て設置し、本会活動の一方の主軸とする。

- 1) 設備充実と運営開始。
- 2) 文献調査と調達開始。
- 3) 情報管理システム整備と研究方法の策定。
- 4) 財務渉外と専任職員配置
助成金導入、年内に研究員の配置を進める。

II. 定款第4条第2項にもとづく事業（登山をはじめとする野外活動と関連する諸分野に関する研究活動と成果の公表）

1. 調査研究事業

- 1) 専門研究会活動の再編強化と育成
ブータン研・チベット研・東部ヒマラヤ研・ラダック研・ワハン研・宗教研・地図研等既存研究会の強化と新規研究会の育成。
- 2) 高所登山における事故防止に関する調査研究。

2. 出版事業（研究・報告）

- 1) カンチェンジュンガ学術遠征隊報告書の発行（8月）。
- 2) カンチェンジュンガ学術遠征隊公式報告書の発行（12月）。
- 3) カラコルム写真集の編集（57年度発行予定）

刊行物棚卸現在高

昭和56年 3月31日現在

刊行物名	数量	単価	評価額
1. ヒマラヤを歩き、登るために	172	2,400	412,800
2. シェルパの履歴書	39	2,400	93,600
3. カンジェラルワ初登頂	164	2,000	328,000
4. インドヒマラヤのすべて	176	2,400	422,400
5. 中央アジア・シルクロード	238	1,600	380,800
6. カシミールの盟主・ヌン	12	3,500	42,000
7. トリスルの28日間	6	3,000	18,000
8. 機関誌「ヒマラヤ」	2,361	500	1,180,500
9. 機関誌「ヒマラヤ」合本	16	8,000	128,000
10. 年報（1980）	342	2,000	684,000
計			3,690,100

- 4) ムスタン踏査報告書の編集(57年度発行)
 - 5) 各隊報告書の発行(ネパール、インド、登山学校)
 - 6) 「ヒマラヤ」英文ダイジェント版の発行
3. 関連学術事業
ネパールへ1名派遣

III. 定款第4条第3項にもとづく事業(ヒマラヤへの登山をはじめとする野外活動・研究・調査などの団体の派遣)

1. カンチェンジュンガ学術遠征派遣事業
登山隊21名を派遣し活動中。学術隊10名を第1次～第3次にわたり派遣する。
2. 高所登山事業
 - 1) サセル・カンリ(7,672m)遠征の具体化。
58年度本隊、57年度偵察隊派遣を予定し、本年度は渉外メンバーのインド滞在による接渉を進める。(IMFとのジョイント遠征)
 - 2) ネパール・ヒマラヤ遠征隊の派遣
ランタン・リ(7,239m)にポストモンソンに(8名)派遣。
 - 3) パンディム偵察隊の派遣。
シッキム・ヒマラヤ・パンディムに57年度本隊派遣を目標に偵察1名を派遣。
(ニューデリー山岳協会とのジョイント)
 - 4) 登山許可申請と取得
ネパール・ヒマラヤ、インド・ヒマラヤに関して57年度以降の許可取得と準備。
 - 5) ポスト・カンチェンジュンガ計画の樹立と渉外。
中期計画によるカンチェンジュンガ遠征終了後の次期構想樹立と調査・渉外活動を開始する。
3. 野外活動事業(セミナー・トレッキングを除く)
ムスタン王国踏査隊の派遣。
10名の隊を56年9月～10月に報道機関との提携のもとに派遣する。

IV. 定款第4条第4項にもとづく事業(機関誌その他の刊行物、登山・野外活動訓練事業、研

修、各種の会合によるこの分野の健全な発達をはかるための指導・啓もう活動)

1. 機関誌発行事業
「ヒマラヤ」第114号～125号の発刊。
(毎月24～30ページ)
2. 出版事業
 - 1) 年報「H I M A L A Y A」第2号発行(1月)および第3号編集。
 - 2) 英字誌「ザ・ジャパニーズ・ヒマラヤン・ジャーナル」第1号の発行準備。(57年度当初に発行予定)
3. ヒマラヤ登山学校事業
 - 1) 第5回ヒマラヤ登山学校の実施。
インド、ナンダ・カート(6,611m)にインストラクター3名を含む13名を派遣する。(9～10月)
 - 2) 第6回ヒマラヤ登山学校の準備・訓練。
クン(7,075mインド)へインストラクター4名を含む20名を派遣する計画で、隊編成と訓練および実務準備をすすめる。
 - 3) 第7回ヒマラヤ登山学校の許可取得。58年実施予定で進める。
 - 4) インストラクターの検定と登録。
登山学校指導員(インストラクター)の検定を実施し、名簿に登録する。
4. 野外活動事業(セミナー・トレッキング)
 - 1) 第2回セミナー・トレッキング隊派遣。
ネパール・ヒマラヤ、ロールワリン20名(インストラクター2名を含む)を派遣。12月～1月(21日間)
 - 2) 第3回セミナー・トレッキング隊派遣準備。
57年12月～58年1月の予定で隊編成を進める。
5. 指導・啓もう事業
 - 1) 日本ヒマラヤ会議の開催。6月～57年3月、秋田、仙台、松本、高知、福岡、大阪、札幌で日山協との連携のもとに実施する。各会場40～50名。
 - 2) 地域ヒマラヤ集会の開催。水戸、富山、広島、長崎で情報を中心に実施、各会場20～30名。
 - 3) 定例集会。東京(毎月)、札幌(隔月)、

- 名古屋、大阪、仙台で、毎回のテーマにもとづいて開催する。
- 4) 小集会。各地で、要請および必要に応じて開催する。
 - 5) インド・ヒマラヤ研究集会。10月～11月に札幌、東京、京都でインド登山財団 総裁 H・C・サリーン氏を迎えて行なう。各会場 50～80名。
 - 6) 第3回インド・ヒマラヤ会議の開催。旧インド・ヒマラヤ情報交換会。56年隊の報告および57年隊の計画検討・研究。11月(東京)
 - 7) 野外活動研修会(秋のヒマラヤ集会) セミナートレッキング参加者を中心に9月(富士山)実施40名。
 - 8) 高所登山懇談会の開催。有識者による討論会(公開)11月(東京)
 - 9) 公式報告会 カンチェンジュンガ隊(8～2月)、ヒマラヤ登山学校隊(11月) セミナートレッキング隊(57年2月)。ネパール・ヒマラヤ隊(1月～3月)、ムスタン隊(12月～2月)、スライドおよび映画。
 - 10) 杜行会。各隊について出発1ヶ月前に行なう。計画発表と地域事情伝達。

V. 定款第4条第5項にもとづく事業(その他、前条の目的を達成するために必要と認める事業)

1. 国際交流事業

- 1) 外国代表の招請。インド登山財団総裁 H・C・サリーン氏を招請し、パーティ懇談会および研究会を開催する。10月～11月。
- 2) 代表派遣。ヒマラヤ諸国およびヨーロッパ諸国に代表を派遣し、各国関係機関・団体との交流を行なう。(併せて情報網の整備)2名
- 3) 各国山岳団体・機関との情報提携。米・英・仏・スイス・カナダ・ニュージーランド・スペイン・ポーランド・ドイツ・チェコ・オーストリアその他と機関誌交

換および情報提携を行なう。

2. 国内関連団体との協調

日本山岳協会、その他関係団体と事業提携・協力・情報交換等を行なう。

3. 組織の整備

- 1) 社団法人設立許可。年度内の早い時期の許可を予定し、当局の御指導を得て進める。
- 2) 基本財産の充実。引き続き拠出金・寄附金等により推進。
- 3) 執行体制の強化。専門委員会スタッフの増員。

4. その他

- 1) 運営諸程・規則等の整備。法人として必要とされるものの整備。
- 2) 事務整備。事務処理方式の合理化と統一。

昭和56年度収支予算書

自 昭和56年 4月 1日
至 昭和57年 3月31日

I. 一般会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
大科目			
基本財産	(410,000)	(450,000)	(△ 40,000)
運用収入	410,000	450,000	△ 40,000
人会金収入	(550,000)	(600,000)	(△ 50,000)
人会金収入	550,000	600,000	△ 50,000
会費収入	(5,560,000)	(4,900,000)	(660,000)
通常会員会費収入	5,160,000	4,500,000	660,000
賛助会員会費収入	400,000	400,000	0
事業収入	(24,000,000)	(9,670,000)	(14,330,000)
情報管理事業	50,000	30,000	20,000
調査研究事業	30,000	20,000	10,000
登山学校事業	10,000,000	1,800,000	8,200,000
高所登山事業	1,040,000	80,000	960,000
野外活動事業	3,800,000	2,000,000	1,800,000
指導啓もう事業	1,700,000	2,600,000	△ 900,000
機関誌発行事業	1,400,000	1,010,000	390,000
出版事業	5,050,000	1,500,000	3,550,000
関連学術事業	100,000	100,000	0
国際交流事業	780,000	480,000	300,000
その他事業	50,000	50,000	0
雑収入	(144,000)	(104,000)	(40,000)
受取利息収入	50,000	30,000	20,000
貸貸料収入	24,000	24,000	0
その他雑収入	70,000	50,000	20,000
繰入金収入	(540,000)	(1,215,000)	(△ 675,000)
特別会計繰入金	0	1,200,000	△1,200,000
別途会計繰入金	540,000	15,000	525,000
前期繰越収支差額収入	(13,347)	(1,397)	(11,950)
前期繰越収支差額	13,347	1,397	11,950
計	31,217,347	16,940,397	14,276,950

支出の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
管理費	(8,136,000)	(7,012,000)	(1,124,000)
給料・手当	4,400,000	3,000,000	1,400,000
旅費・交通費	250,000	350,000	△ 100,000
通信・運搬費	330,000	180,000	150,000
電話費	480,000	300,000	180,000
文具費	90,000	150,000	△ 60,000
消耗品費	40,000	50,000	△ 10,000
営繕費	20,000	30,000	△ 10,000
什器備品費	250,000	500,000	△ 250,000
印刷製本費	550,000	650,000	△ 100,000
図書費	40,000	50,000	△ 10,000
賃貸料	1,200,000	1,200,000	0
光熱水費	120,000	100,000	20,000
会議費	70,000	105,000	△ 35,000
諸税金費	30,000	60,000	△ 30,000
交際費	30,000	30,000	0
広報費	90,000	90,000	0
福利厚生費	30,000	50,000	△ 20,000
法人諸費	50,000	50,000	0
手数料	12,000	17,000	5,000
諸謝金	10,000	20,000	10,000
雑費	50,000	30,000	20,000
事業費	(19,910,000)	(8,790,000)	(11,120,000)
情報管理事業費	40,000	50,000	△ 10,000
調査研究事業費	100,000	100,000	0
登山学校事業費	7,800,000	1,180,000	6,620,000
高所登山事業費	930,000	40,000	890,000
野外活動事業費	3,200,000	1,240,000	1,960,000
指導啓もう事業費	1,220,000	1,950,000	730,000
機関誌発行事業費	1,900,000	1,900,000	0
出版事業費	3,500,000	1,100,000	2,400,000
関連学術事業費	300,000	300,000	0
国際交流事業費	900,000	900,000	0
その他事業費	20,000	30,000	△ 10,000
繰入金	(2,670,000)	(700,000)	(1,970,000)
基本財産会計繰入金	1,370,000	0	1,370,000
退職引当金繰入金支出	300,000	200,000	100,000
研究所会計繰入金支出	1,000,000	500,000	500,000
予備費	(500,000)	(400,000)	(100,000)
予備費	500,000	400,000	100,000
次期繰越収支差額	(1,347)	(38,397)	(37,050)
次期繰越収支差額	1,347	38,397	37,050
計	31,217,347	16,940,397	14,276,950

Ⅱ. 基本財産会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
基本財産運用利息	410,000	450,000	△ 40,000
指定寄附金収入	2,000,000	2,400,000	△ 400,000
法人化提出金収入	240,000	450,000	△ 210,000
終身会員収入	500,000	1,670,000	△ 1,170,000
一般会計繰入金収入	1,370,000	0	1,370,000
雑収入	1,000	1,000	0
前期繰越収支差額	7,058,750	6,619,830	438,920
計	11,579,750	11,590,830	△ 11,080

支出の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
一般会計繰入支出	410,000	450,000	△ 40,000
雑費	10,000	30,000	△ 20,000
次期繰越収支差額	11,159,750	11,110,830	48,920
計	11,579,750	11,590,830	△ 11,080

Ⅲ. 別途会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
別途積立金運用利息	10,000	15,000	△ 5,000
特別会計繰入金収入	1,020,000	0	△ 1,020,000
一般会計繰入金収入	300,000	200,000	100,000
前期繰越収支差額	208,875	498,875	△ 290,000
計	1,538,875	713,875	825,000

支出の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
一般会計繰入金支出	540,000	15,000	525,000
次期繰越収支差額	998,875	698,875	300,000
(退職金引当)	(500,000)	(200,000)	(300,000)
(運営基金)	(498,875)	(498,875)	(0)
計	1,538,875	713,875	825,000

Ⅳ. ヒマラヤ研究所特別会計

収入の部

(単位 円)

勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
一般会計繰入金収入	1,000,000	500,000	500,000
会費収入	100,000	100,000	0
寄附金収入	1,500,000	1,500,000	0
助成金収入	4,000,000	5,000,000	△ 1,000,000
雑収入	50,000	50,000	0
計	6,650,000	7,150,000	△ 1,000,000

支出の部

(単位 円)

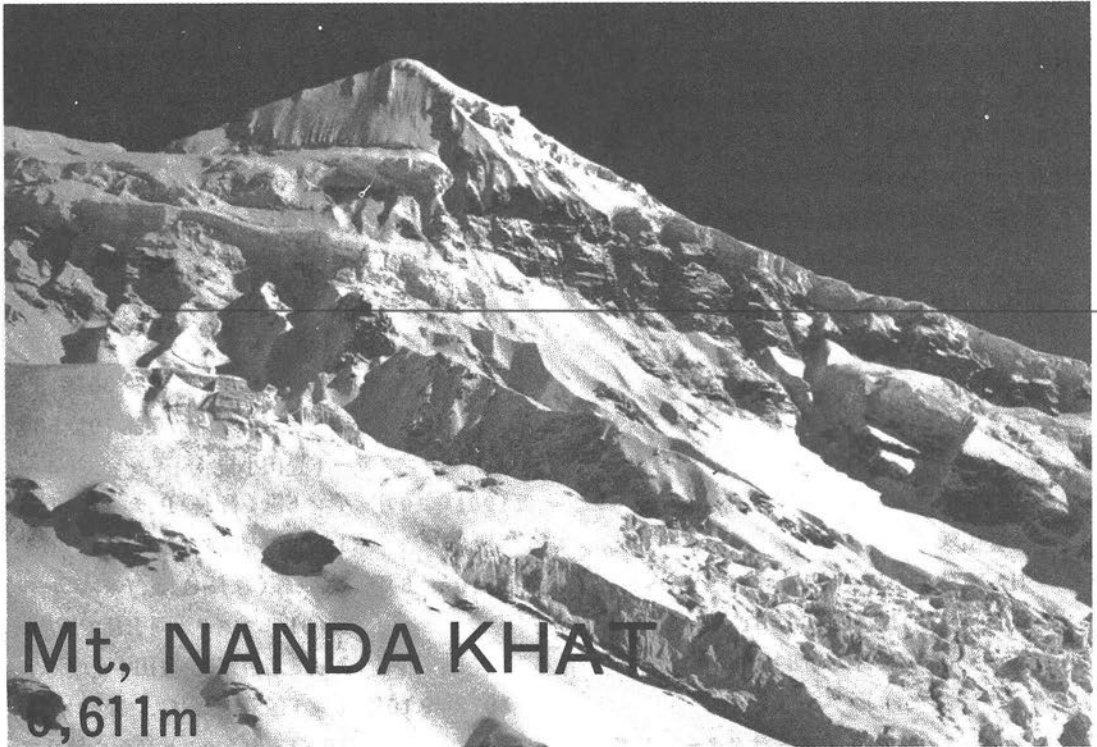
勘定科目	予算額	前年度予算額	増・減(△)
管理費	2,500,000	1,530,000	970,000
初年度調弁費	800,000	1,200,000	△ 400,000
事業費	3,230,000	4,300,000	△ 1,070,000
(文献費)	(2,200,000)	(3,550,000)	△ 1,350,000
(調査研究費)	(380,000)	(300,000)	80,000
(出版費)	(500,000)	(280,000)	220,000
(交流費)	(150,000)	50,000	100,000
予備費	120,000	120,000	0
計	6,650,000	7,150,000	△ 500,000

総括収支計算書

(カンチ特別会計を含まず) (単位 円)

収入の部		支出の部	
種別	金額	種別	金額
入会金収入	550,000	一般会計管理費	8,136,000
会費収入	5,660,000	一般会計事業費	19,910,000
事業収入	24,000,000	ヒマラヤ研究所支出	6,650,000
雑収入	205,000	別途会計支出	0
基本財産運用収入	410,000	雑	1,000
寄附金収入	3,740,000	一般会計予備費	500,000
助成金収入	4,000,000	小計	35,206,000
終身会員収入	500,000		
特別会計繰入金収入	1,020,000	次期繰越収支差額	12,159,972
前期繰越収支差額	7,280,972	計	47,365,972
計	47,365,972		

1981年H A Jヒマラヤ登山学校計画書



1980年立命館大学提供

■ 趣 旨 ■

H A Jは創立以来、ヒマラヤ諸国との友好・親善・相互理解をモットーに、登山・学術・その他幅広い分野にわたって各種の文化活動を展開しております。1977年以来実施しております、「ヒマラヤ登山学校」もその一環であります。

御承知のように、ヒマラヤは地球上で最も高い山岳地域であり、そこでの登山活動は高所という低酸素下で行なわれるため、困難かつ複雑な要素を含んでおります。また、登山許可の取得や、通関を始めとする種々の手続き、渉外など登山以前に処理しなければならない多くの仕事があります。

然し、ヒマラヤの素晴らしさにふれ、その国と人とを理解することは意義あることであり、一人でも多くの人にヒマラヤ登山を体験させようというのがH A Jのめざすところでもあります。

この「ヒマラヤ登山学校」は、確かな技術と経験を有する指導者（インストラクター）の統括のもとに、安全かつ確実を第一義として必要とされる諸準備をすすめ、国内での学習を行ない、ヒマラヤの高所を経験し、ヒマラヤ登山の基礎と実際を経験しようとするヒマラヤ登山のガイドンス・システムであります。そして、さらに大きなヒマラヤ計画を進めて行ける人を育てることも目的としております。

諸外国には、国家の援助のもとに活動しているこの種の学校がありますが、我が国では極めてユニークなものであります。

過去4年間に実施した「ヒマラヤ登山学校」は、第1回を、1977年秋ガルワール、タルコット峰（6,099m）で日本山岳会に協賛しておこなって以来、第2回1978年夏カシミール、ヌン峰（7,135m）、第3回1978年秋ガルワール、トリスル峰（7,120m）、第4回1979年秋、キャシードラル峰（6,400m）、第5回ガンゴトリ、ケダルナート峰（6,940m）と続いており、いずれも成果をあげてきております。

■ 実行・推進の体制 ■

◎日本ヒマラヤ協会登山学校委員会

会長 柴田金之助 委員長 山倉洋一
委員 尾形好雄 小島守夫 西郡光昭

◎日本ヒマラヤ協会登山学校事務局

■ 登山隊の名称・構成 ■

1. 名 称

1981年日本ヒマラヤ協会インド・ヒマラヤ登山隊
HAJ GARHWAL HIMALAYA
EXPEDITION 1981
(略称 HGE81)

2. 構 成

隊長 1名 インストラクター 2名
ドクター 1名 隊員 8名
リエゾンオフィサー 1名

■ 登山計画概要 ■

1. 目標の地域・山

インド・ガルワールヒマラヤ、ナンダデヴィ山群
ナンダカート(Nanda Khat) 6,611m

2. 目 的

- (1) 6,000m峰の短期間による登頂
- (2) ヒマラヤ登山実践の基本習得

3. 時 期

1981年9月～10月

4. 目標の山の概念

(1) ナンダカートの位置・山姿

ナンダカート(6,611m)は、ガルワール・ヒマラヤ東部のナンダ・デヴィ内院の東に位置する。北にはロングスタッフの科尔(5,910m)を隔ててナンダデヴィ東峰(7,434m)、南にはパンワリ・ドワール(6,663m)、東に

は有名なトレイル・パス(5,312m)を経てナンダ・コット(6,861m)へ続いている。

主稜からは、壮大なナンダ・デヴィ内院を見下し、盟主ナンダ・デヴィ(7,816m)が眼前に巨大な姿をそびえたたせ、また遠くパンチ・チュリ山群、西ネパールの山々及びチベットのカイラス(6,714m)が望める。

その山姿は見る方角によって様々が変わるが、ピンダリ氷河側からはたおやかな雪峰となり、ロングスタッフ・コル方面からは鋭角の頂稜が美しい。

※ナンダカートの位置 北緯 30度18分
東経 79度58分

(2) ナンダカート登山小史

- 1961年10月 インド隊(隊長 P.チュウダリー)
10/20 ピンダリ氷河から初登頂
- 1970年 5月 インド隊(隊長 A.K.チャンデカル)
5/31 ピンダリ氷河上部で雪崩により3名遭難死 登山中止
- 1972年9,10月 インド隊(隊長 G.シャー)
10/13 ピンダリ氷河から第2登頂
- 1978年 6月 インド隊(隊長 P.バッタチャルジー)
ピンダリ氷河より試登
6/22 無名峰に登頂

5. 行動計画の概要

(1) 登攀ルートの概要

ピンダリ氷河とチャングーチ氷河の合流点附近約4,000mにBCを設営、ピンダリ氷河下部アイスフォールをぬけ、トレイル・パス下部に広がる雪原に出る。この雪原にC1(約5,100m)を建設し、ナンダ・カートから東にのびる稜にルートを求める。東稜の約6,000m附近に最終キャンプC2を建設し頂上に至る。

(2) 登山行動の概要

限られた登山期間(13日間)において、全隊員が無理なく高所の順応を得て登頂できる行動を前提とし、登山期間を3期に分けて行動する。

i) 第1期

先発隊(2名)によるBC、C1の建設及びピンダリ氷河下部アイスフォールのルート

の確保及び本隊の受入れ準備。
本隊々員の4,000m台における高度順化。

ii) 第2期
6,000m台までの高度順化及び最終キャンプの建設。

頂上アタック体制の確立

iii) 第3期

ナンダ・カートの登頂及び各キャンプの徹収。

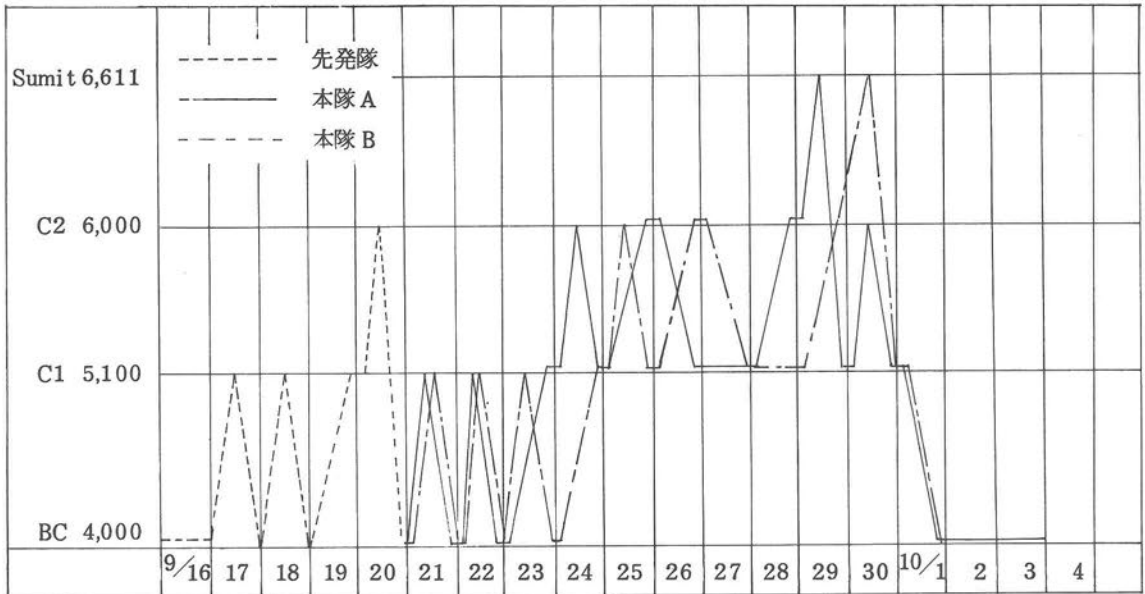
短期間に登頂を可能にするには、高所への順応が大きなるファクターとなるので、積極的な高所順化への対応が望まれる。

登山期間は、登頂の成功に関係なく13日間で打切る。

(3) 日 程

日数	月日	日	程
9	9/3	先発隊(2名)成田発	デリー着
8	4	先発隊々務処理	登山手続
7	5		関係機関あいさつ
6	6		隊荷通関
5	7		無線機使用許可
4	8		調達物資購入
3	9		再梱包
2	10		先発隊キャラバンスタート デリー — アルモラ
1	11	本隊東京集合	アルモラ — カブコット
1	12	本隊 成田発	カブコット — ロハルケット
2	13	本隊キャラバンスタート	デリー — アルモラ
3	14	アルモラ — カブコット	ダクリ — ドワリ
4	15	カブコット — ロハルケット	ドワリ — マルトリ
5	16	ロハルケット — ダクリ	マルトリ — BC
6	17	ダクリ — ドワリ	隊荷集結
7	18	ドワリ — マルトリ	下部アイスフォールルート工作
8	19	マルトリ — BC	C1建設
9	20	隊荷整理	
10	21		
11	22		
12	23		
13	24		
14	25	C2建設	
15	26		
16	27	アタック体制完了	
17	28		
18	29	第1次アタック	
19	30	第2次アタック	
20	10/1	BC集結	
21	2		
22	3	帰路キャラバン準備	
23	4	BC — ドワリ	
24	5	ドワリ — ロハルケット	
25	6	ロハルケット — カブコット	
26	7	カブコット — アルモラ	
27	8	アルモラ — デリー	
28	9	隊荷整理 帰国準備	
29	10	帰国 デリー発	
30	11	成田着 解散	
31	12		
32	13		

(4) 行動予定表



6. 登山隊連絡先

(1) 登山隊留守本部

〒160 東京都新宿区高田馬場 2-23-1

隊員 鈴木陽一(28)

淀橋食糧ビル 506号

日本ヒマラヤ協会 TEL 03-367-8521

英文電略 HIMALAYALP

坂本正智(43)

(2) 現地連絡先

C/O Shikhar Travels Private Ltd

1701 Nirmal Tower 26, Barakhamba Road

阿部直彦(35)

New Delhi : 110001 INDIA

Tel : (New Delhi) 42555, 42666

Telex : 031-4364 SHIK IN

本田荘八(30)

Gram: SHIKKEE

7. 総経費

900万円

埜口正則(29)

8. 隊員名簿

隊長 小島守夫(41)

寺本政幸(30)

ドクター 西郡光昭(41)

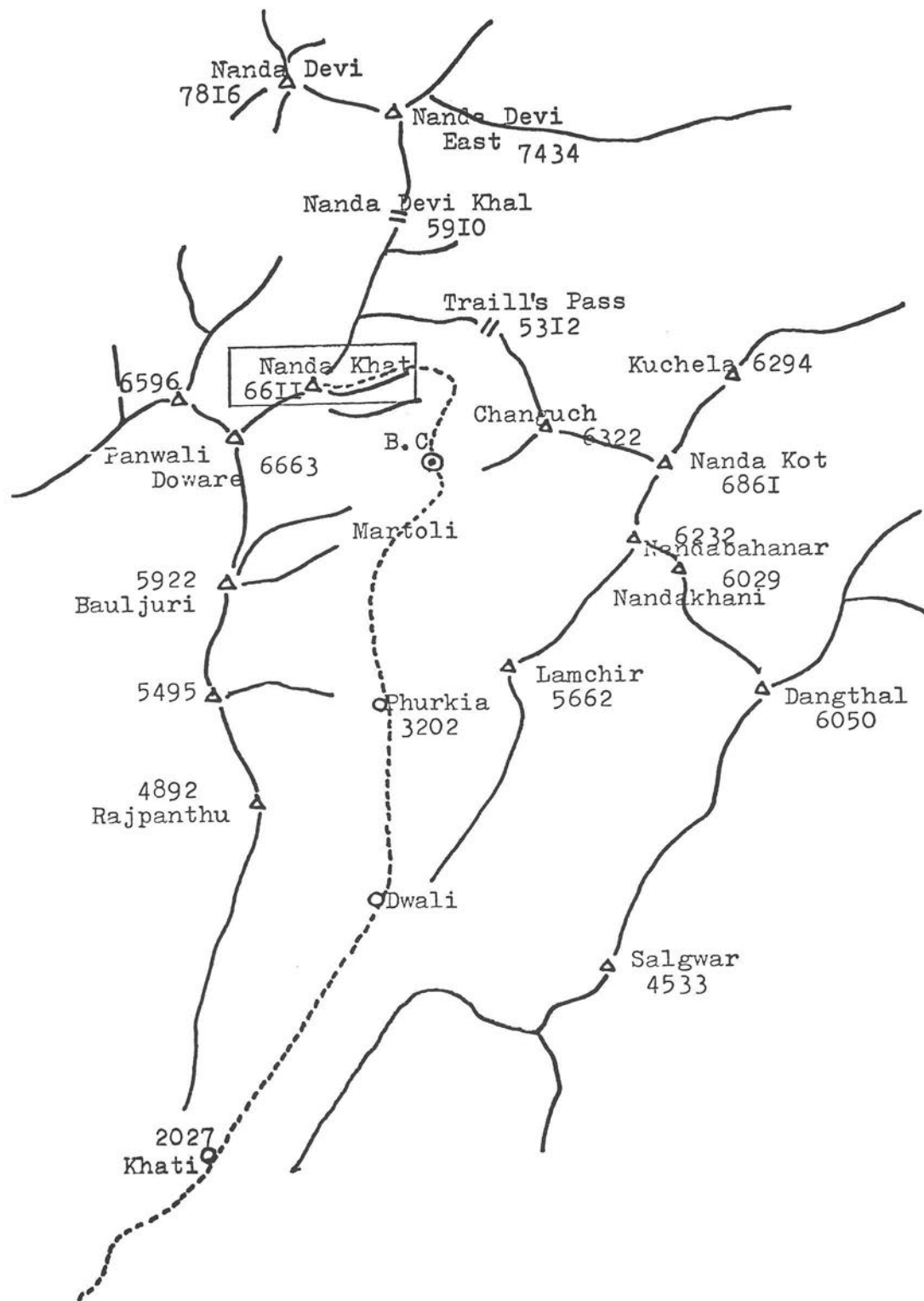
高井勝夫(25)

インストラクター 藤倉和美(31)

斎藤孝雄(35)

伊東満(30)

ナンダカート周辺の山々





ヒウチエン
ナラシコ科、白色

花を求めて(10)

水野 勉

前号では、「花を求めて」を休んで、自分にも読者にも一息入れるようにした。それで、いよいよ、中国西南部における植物探検の本論に入るわけであるが、その前に少し脱線することを許して頂きたい。というのは、本誌112号(3月号)掲載「ヒマラヤ放談」の内容に関するコメントをしておきたいのである。そうでないと、誤解される恐れがあるからである。

第1に、日本山書の会についての部分である。「ヒマラヤとか海外の書物を読み漁るような人はいない。しかもコレクターが多いんです。海外の文献を漁ってるのは私だけですわね」とあるのは、誤りである。日本山書の会にはヒマラヤや海外の書物を読む人はかなりいるし、コレクターが必ずしも多くはない。日本山書の会の主流は何といっても、研究であり、蒐集ではない。「山書」という名称からイメージされるところとはいささか違うのである。また、ぼくだけが海外の文献を集めているわけではない。

この箇所、ぼくが良かったのは、自分が洋書を集めることになった動機で、はじめの頃、洋書を集めている会員が近くにいず、和書については多くの先輩がすでにいたので、自分は洋書を集めてみようとしたのである。どうして、どこで誤ってしまったのか、ふしぎである。

第2に、ディーレンフルトに関する部分である。「山の登り方も雑だし、書いた本も雑です」となっているが、ヒマラヤ遠征のあり方については、メイスンが批判しているとおり、ディーレンフルトのやり方はあまり好きではないが、かれの報告書は、ぼくの好きな本である。特に、「バルトロ」「ウンゼレ・ヒマラヤ」などのすばらしさは類書がない。このことについては、「山書研究」24号

に詳しく書いているとおりでである。

A・E・プラットは現在では殆んど忘れ去られているけれども、かれは中国の自然史探検において新時代を開いた重要な人間である。

プラットが中国へ向って英国を出発した1887年以前には、中国極西部に関する知識は殆んど外国には届いていなかった。プラット自身もそこで何がみれるか、さっぱりわからなかった。その紀行 *To the Snows of Tibet through china* のはじめに、かれは次のように書いている。「この広大な国についても、探検家やナチュラリストにとって新鮮なものが非常に少なくなっている、手をつけられていない分野を見出すことが、年々むづかしくなってきた。したがって、一つの方法として、これまで表面的にしか調査されていない分野に向わざるを得ないであろう」チベット辺境地域の大部分がもうすでにヨーロッパ人によって探検されてしまったという前提は、明らかに誤りである。

しかしながら、このように思い込んでしまったので、プラットは中国の極西部を探查しようという、それだけの目的で英国をはなれる決心をしたのである。かれはこのような考えを持った最初のヨーロッパ人の一人であった。オーギュスト・アソリのように、公務を帯びた人(スリエ神父のような宣教師をも含めて)とE・H・ウィルソンおよびジョージ・フォーレストのタイプである今世紀のプロフェッショナルな植物採集者とを結びつける役目を果たしたといえるであろう。

プラットとウィルソンは互いにたいへんよく似た点を持っている。ウィルソンはだれの目でもはっきりわかるようにプラットの足跡を追った。けっして真似というわけではない。ウィルソンはプ

ラットよりもはるかに広範囲に行動したが、プラットは学術探検にとって最適の中心地域のいくつかを訪れようとしたからである。

A・E・プラットはこの未踏の新地域を探索した旅行者のうちでもっとものんびりした旅行者であったにちがいない。かれは自分の仕事を徹底的に、しかも自分の気儘にやろうとするタイプの男であった。そんなわけで、1887年のいう時期に、全家族を連れて英国を出発して、ゆったりした旅行をしたのだった。家族とは、その当時最遠隔地の条約港宜昌で別れた。その地で、かれはオーギュスト・アンリと会った。これはたいへん幸運であった。というのは、プラットははじめは植物学的採集をしようという気持は全くなかったからである。アンリとの出会いで、プラットは植物採集にたずさわることになり、アンリが訓練した中国人を雇うことになった。

1887年には、プラットはずっと宜昌付近や有名な峡谷を歩き廻った。ときには宜昌の南方50マイル程のところにある長陽の深い森林の丘陵へも足をのびした。1888年になっても、だいたい同じような行動範囲を保って、長陽丘陵で夏をすごした。妻が病気になったので、1888年か1889年にかけての冬を上海ですごした。しかし、1889年の春に妻が回復すると宜昌に戻った。それからすぐに、プラット夫人と家族は英国へ帰った。それから、かれはもっと奥地へと向ったのだった。

かれと、助手のドイツ人、クリヘルドルフは、ハウスボートを建造してもらい、それに乗って、揚子江をさかのぼり、重慶から更に瀘まで行き、そこで主流をはなれ、嘉定まで岷江をさかのぼった。それから耳山まで陸路をたどり、その山をのぼってから、公道をとおって打箭炉まで行った。この旅行では、植物採集者たちを耳山に残していた。その間、採集者は仕事を自由に任せられ、しかも、すべて順調に行われたとプラットは述べている。これらの採集者たちは耳山で夏の大部分をすごしたはずなのに、かように植物の豊富な地域で採集された植物について、何らの記録も存在しないというのは、じつに奇妙である。この辺は後にウィルソンによって徹底的に調査されたのである。

打箭炉に近づいたとき、プラットはたいへん感

動をうけている——「峡谷から見上げると、白雪を頂く山々が間近にそびえ、その下には、暗緑色の松の森林があった。植物相が垂直に異った帯となって、美しく極立ってみえた。雪の下には、草が生育し、それから松の森林がつづき、ジャクナゲ、常緑樹の混生林、更に、谷には亜熱帯の植物群がずっときれいに並んでいた」

翌年、かれとその仲間は嘉定經由でふたたび打箭炉に向った。今度は途中、峨眉山を探索した。プラットの観察はいつもの如く、非常に正確である。かれは山中で飲まれ、売られていた特殊な茶について記述している。そして幸にも、この雨の多い山頂から、すばらしい眺めを得ることができた。西方の北寄りには、雪の山々が見え、打箭炉のかなたに青空をバックに美しく浮んでいた。雲海はかなり低くひろがり、それらの上に、山が連なり、そびえる様は、すばらしい眺めであった。100マイル以上の遠くまで見えることは、春にはじつに珍しいのである。

打箭炉に着いてから、クリヘルドルフはムビンに出かけた。ダビット神父以来はじめて、この小村を訪れた最初の外国人であった。その間、プラットはその付近に何回となく小旅行を試みた。幸運なことに、スリエ神父と同行できた。その後、かれは西方、モン・ミエンに移動し、小屋を建て、そこで夏をすごした。

この地域は、ブナ、カバ、クルミの混生林で、それに竹やジャクナゲ、サクラソウの多種が混っていた。しかし、また、一方じつにひどい気候であった。プラットの日記にも、6月5日に、ひどい吹雪があり、ジャクナゲの花がすべて落ち、雪が深く積ったことが書いてある。

悪天候がプラットのせいになされ、かれは急いで打箭炉に戻り、そこでアンリ公に会っている。嘉定への帰途に、かれはふたたび峨眉山を訪れたが、今度は天候が悪く、滞在の十日間ずっと雨つづきだった。それから、河を下って上海へ行き、英国へと帰った。

このすぐれた旅行家が、植物よりは、鳥や昆虫の方に興味を持っていたことは、われわれ花を愛するものにとっては残念なことであった。

山岳の世界

大修館書店

特にヒマラヤと限定した図書ではない。「山のエンサイクロペディア」をめざしたと思われるがいわゆる事典形式の編集にはなっていない。

しかし、こと山岳に関する分野を広範に網羅しており、万般の知識を得たりあるいは整理するのにまことに好適な書である。

一読して、山とは何と素晴らしい世界なのか、登山の舞台とはかくも豊かな広がりとしなやかさを持つものかと慨嘆にも似たつづきをもらしたくなる。

昭和32年に朋文堂から出されたモーリス・エルゾグ監修による「山岳」と範ちゅうを同じくするものであろう。「山岳」では、「山の探究」、「山の科学」、「山の芸術」の3分冊として発行された。「山岳」には、山をめぐる人間の活動に重点をおいて記述に多少のウェットが感じられたものである。山登りの文化的側面が強く出されていたように記憶している。当時、このように集大成されたものはなかっただけにずいぶんと利便を感じた。

「山岳の世界」はよりドライであると思う。自然事象としての「山」に関してはより深みがそえられている。両書と比較してみると、この20余年間の科学の進歩がいかに急速であったかが理解できよう。

人工衛星からの写真が随所に用いられている。実際、山岳を重層的にも、マクロ的にもとらえる上で衛星写真は実に有効である。アメリカ航空宇宙局(NASA)の衛星写真はコンピューター登録さえすればわれわれ登山者でも容易に利用できるシステムができています。カタログも発行している。幸運ならば自分がヒマラヤの頂上に立った瞬間の写真を手に入れるまでになっている。

当日の雲量の程度によって頒布価格がちがうのも親切である。(もちろん雲が多いほど安い)

登山に関しては「山岳の生活と文化」の項をもうけて収めている。

登山以前からの人間の山とのかかわりから始まっているが、通読して登山というものの「流れ」を把握するにはこの程度のものがちょうどである。特に高所登山に関して最近の時流をよくとらえているのは著者に人を得ているからであろう。日本語ほん訳・校訂に山崎安治氏がかかわっている。1980年までの動きが入っているのは驚きである。

「太陽系の山」という一項が設けられているのはいかにも現代を感じさせられる。

太陽系惑星内での最高峰は、火星にあるオリンポス山(23,000m)だということをはじめて知らされた。しかし、直径600kmの巨大な「山」だというから、いったいどのような登山方法がとられるのだろうか。

ドイツで編さんされたもので著者陣は一流である。日本語ほん訳・校訂者も人を得ているといえよう。日本の山の写真も比較的多い。西堀栄三郎、宮下啓三の両氏が監修者となっている。自然保護に関する直接的記述は少ない。

最近目立つことだが高価な本が多くなった。特に本書のような集大成物がそうである。本もインテリアの一部を構成している風潮もあり、また、出版側の事情もあるようだ。

比較的小金には恵まれていない(はづ?)若い登山者にとっては困惑する向きも多いと思われる。本書なども分冊が可能であろう。かくいう小生もどうするか迷っているうちに協会に寄贈されたと聞いてそれを手にして書いている。

集成された親切な本が多くなったのはありがたいことだが、かつて、たくさん書を漁りながら自分なりに情報を組みたてた頃にくらべるとその容易さにうしろめたい気がする。ほんとうに身についたのは自らが苦勞して調べあげたものだけだったように思う。本書もそのための導入部分として生かして使いたいものだ。(い)

1981年4月20日発行 B5大判 304頁 18,000円

▶ 気忙しい気分の続いた事務局もようやく平生の
時が持てるようになりました。

カンチ登山隊も終盤に近づき、日本への帰国の
便りが聞かれるようになりました。今カトマン
ズ、それぞれの思いはどこにあるのでしょうか。
男のロマンがいつの日か芽を吹き、またはるか
ヒマラヤへと飛び立って行く姿が目にかびま
す。もうすぐ事務所も賑わうことでしょう。
とりあえずお疲れさま。

▶ 不慣れでおぼつかない編集も、どうにか毎月皆
様の手元にお届けすることができました。
次の方への引継ぎが待たれます。（緑川）

事務局日誌（5月）

- 9日(土) カンチ登山隊主峰・ヤルンカン登頂
- 16日(土) 事務局打合せ（稲田、緑川、細貝）
- 17日(日) 昭和56年度日本ヒマラヤ協会理事会
" " 通常総会
- 23日(土) ヒマラヤNo.115号発送

ヒマラヤNo. 116（7月号）

昭和56年6月10日印刷 56年7月1日発行
 発行人 柴田 金之助
 編集人 緑川 恭子
 発行所 日本ヒマラヤ協会
 〒160 東京都新宿区高田馬場 3-23-1
 淀橋食糧ビル506号



インドヒマラヤを日本語で!!



UNITED TRAVEL SERVICE(P)Ltd.

- インドヒマラヤ全域のアレンジをすべて日本語
でひきうけています。本社にも東京事務所にも日
本語に堪能なスタッフが多勢おります。
- 許可取得から通関、隊荷輸送、ポーターアレン

ジまで、遠征・トレッキングのすべてを取り扱っ
ております。

■詳細は東京事務所のサニーまでお問合せ下さい。
もちろん日本語で!!

東京事務所 〒141 東京都品川区西五反田 2-23-11-202 電話 03-493-4920

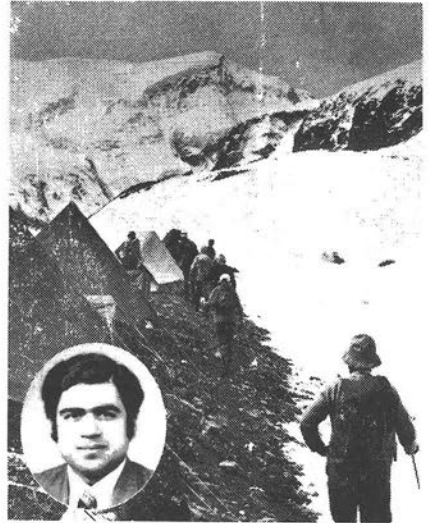
本社（デリー） 802 Nirmal Tower, 26 Barakhamba Road, New Delhi India
Phone: 46107, 42804, 43984, Telex: ND3174 Cable : YOKOSO

Shikhar Travels

— シカール・トラベル —

“魅惑の インド・ヒマラヤ”

シッキム・ブータン・ガールワール・クマオン
クル・マナリ・ラダック・ネパール……
へのトレッキングや登山を計画されている日本の皆さん！
当、シカール・トラベルは、通関・隊荷輸送からガイド、
ポーター、ポニーのアレンジなどすべてのご用命を承ります。



CAPT SWADESH KUMAR
(MANAGING DIRECTOR)

Shikhar

TRAVELS PRIVATE LIMITED



1,701, Nirmal towers,

26 barakhamba road new delhi-110001

tel. 42555, 42666 tel. 931-4364 SHIK IN Cable SHIKHE

Branch office: Gangtok

Camp office: Joshimath & Uttarkashi



全世界のネットワーク

AFIA ホーム 保険会社

海外 山岳 保険

取扱代理店

郷インシュランス・コンサルタント

[ホーム保険会社代理店]

〒100 千代田区丸ノ内3-1-11

国際ビル8F

TEL. 03-281-2981

相談所

ホーム保険会社首都圏支店

〒100 千代田区丸ノ内3-1-1

国際ビル8F

TEL. 03-211-4401

担当：寄木康男

ヒマラヤへの装備



◎遠征隊の装備、相談にのります。



ICI 石井スポーツ

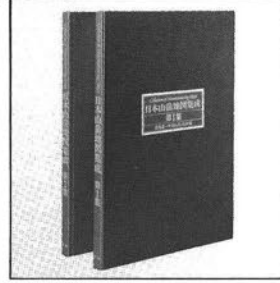
至中野 至大久保 至新大久保 至新宿	至池袋 至有楽町	ICI山用品本店 ICIテニス用品 ICIスキー用品 本屋 大久保通り	至池袋 至有楽町
	至池袋 至有楽町	ICIサッカー・野球用品	至池袋 至有楽町

- 新宿登山本店 / 〒160東京都新宿区百人町2-2-3 ☎03(208)6601(代)
- 新宿西口店 / 〒160東京都新宿区西新宿1-16-7 ☎03(346)0301
- 水道橋ハードギアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-14 ☎03(264)5575
- 水道橋ソフトウェアショップ / 〒101東京都千代田区三崎町2-8-6 ☎03(264)8901
- 大宮店 / 〒330埼玉県大宮市宮町2-123 ☎0486(41)5707
- 高崎店 / 〒370群馬県高崎市新町105 ☎0273(27)2397
- ICI通販部 / 〒160東京都新宿区大久保2-19-10東和ビル内 ☎03(200)7219

学研の山岳地図集成シリーズ

全国の主要山岳を網羅。山岳関係者の基本図書。

日本山岳地図集成 全2集



■編著 吉沢一郎ほか
 主要山岳を中心に図取りした、いままでにない本格山岳地図集。全国の一、五〇〇メートル以上の山岳を網羅し、山名、沢名、ルート名をはじめ、山小屋やキャンプ地、水場などの登山情報を豊富に収録した。
 全2集セット現金価格(定価) 280,000円
 (分割払もあります)

- 第1集 総頁200頁
収録地図54図 解説99頁
- 第2集 総頁190頁
収録地図40図 解説78頁
- B4判(364×257ミリ)
上製本/箱入り

永遠の標的ヒマラヤ・カラコルム連峰を世界で初めて集大成。

世界山岳地図集成 全2集



■監修 吉沢一郎
 世界の登山家の夢であるヒマラヤ・カラコルム連峰が全地域大縮尺で集大成されたのは世界でも初めてである。美しいレリーフ4色地図とカラー写真、ルート解説など最新の情報が山岳愛好家だけでなく広く興味をそそる。
 カラコルム・ヒンズークシユ編
 ■編著 高木泰夫/宮森常雄
 ●B4判/上製本/総頁350頁
 /カラー32頁
 ヒマラヤ編
 ■編著 諏訪多栄成・葉伸義美ほか
 ●B4判/上製本/総頁328頁
 /カラー32頁
 全2集セット現金価格(定価) 400,000円
 (分割払もあります)

残雪が描く「山の芸術」の豪華山岳写真集。

山の紋章 雪形 田淵行男

●6月下旬 新発売
 ●名著「日本アルプスの蝶」につぐ不巧の書。雄大なカメラワークと誌情溢れる名文で綴った山行50年の総決算。
 ●造本・体裁
 ●A4判/総頁332頁(4色108頁・1色52頁・解説152頁・その他10頁) ●収録写真カラー1115点モノクロ193点
 ●定価 180,000円

美しき氷河期の後裔「高山蝶」を克明に記録した写真集。

田淵行男 日本アルプスの蝶

日本アルプスの雄大な自然に息づく9種の高山蝶の生活史を克明に描く。山岳写真家、田淵行男氏が34年の歳月と尽きせぬ情熱を込めたライフワークの集大成。
 ●造本・体裁
 ●A4変形判/総頁466頁(カラー1216頁モノクロ136頁・解説174頁) ●収録写真(カラー約400点・モノクロ約200点)
 ●定価 250,000円

発行 学研 学習研究社

●内容見本ご希望の方は下記宛て請求ください。
 (株)学研美術販売
 〒145 東京都大田区上池台4 40 5 ☎東京(03)720 1111代